比恵遺跡群 25

—比恵遺跡群第58次調査の概要—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第561集

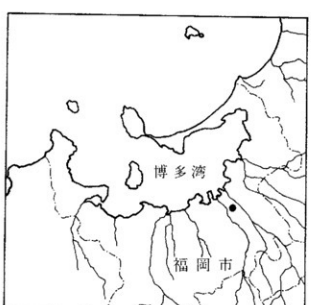
1998

福岡市教育委員会

比恵遺跡群25

—比恵遺跡群第58次調査の概要—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第561集



調査番号　9601
遺跡略号　HIE-58

1998

福岡市教育委員会

序

古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、多くの文化財が残されています。福岡平野のほぼ中央部を南東から北西に延びる那珂・比恵台地も例外ではなく、旧石器時代以来の数多くの文化遺産が発見されてきました。しかし、その一方で福岡市の都心部に近いこの地域は、半世紀も前の区画整理以来住宅地となり、今や高層ビル化が進みつつあります。

福岡市教育委員会では、開発によってやむなく破壊される遺跡につきましては、発掘調査を実施し、記録保存に努めて参りました。本書で報告いたします比恵遺跡群第58次調査も、市営住宅の高層化にともなって発掘調査を行ったものです。

比恵遺跡群第58次調査では、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての掘立柱建物跡・井戸・溝など多量の遺構・遺物を検出いたしました。

本書が学術研究の場で、また市民各位の文化財に対する関心と保護に活用されることを希望いたします。なお、調査に当たってご指導・ご助言をいただいた諸先生・関係各位・また快く調査にご協力いただきました皆様に、深甚の謝意を表します。

平成10年3月31日

福岡市教育委員会

教育長　町　田　英　俊

例　言

1．本章は、市営住宅建て替えに先立って福岡市教育委員会が発掘調査を実施した、比恵遺跡群第58次調査（福岡市博多区博多駅南４丁目地内）の概要報告書である。

2．本章の編集・執筆には、大庭康時があたった。なお、第三章のナイフ形石器に関する報告は、吉留秀敏氏（福岡市埋蔵文化財センター）にご執筆いただいた。

3．本章に使用した遺構実測図は、大庭・折茂由利・大庭智子が作成し、折茂由利が浄書した。

4．本章の遺構実測図中および文中に用いている方位は、すべて磁北である。

5．本章に使用した遺物実測図は、井上涼子・上塘貴代子・大庭康時・吉留秀敏（ナイフ形石器）が作成し、森本・井上・上塘・折茂・吉留（ナイフ形石器）が浄書した。

6．遺構写真・遺物写真は、大庭康時が撮影し、萩尾朱美が焼き付けした。

7．遺物・記録類の整理には、今井民代・岡山良子・下山慎子・萩尾朱美・森寿恵・小田麻美子・深田みどりがあたった。

8．本調査にかかわるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理・公開される予定である。

遺跡調査番号	9601	遺跡略号	ＨＩＥ－58
調査地地番	博多区博多駅南４丁目７番	分布地図番号	東光寺37
開発面積	1200㎡	調査面積	736.20㎡
調査期間	1996年４月１日～1996年６月25日		

本 文 目 次

第一章　はじめに……1
　1．発掘調査にいたる経過……1
　2．発掘調査の組織と構成……1
　3．調査地点の立地と歴史的環境……2
　4．周辺の既往の調査……4

第二章　発掘調査の記録……7
　1．発掘調査の方法……7
　2．基本層序……7
　3．調査の概要……8
　　(1)　1区……8
　　(2)　2区……10
　　(3)　3区……10
　4．遺構と遺物……10
　　(1)　掘立柱建物跡……13
　　1号掘立柱建物跡（SB01）……13
　　2号掘立柱建物跡（SB02）……15
　　3号掘立柱建物跡（SB03）……15
　　4号掘立柱建物跡（SB04）……16
　　5号掘立柱建物跡（SB05）……19
　　6号掘立柱建物跡（SB06）……19
　　7号掘立柱建物跡（SB07）……20
　　8号掘立柱建物跡（SB08）……21
　　9号掘立柱建物跡（SB09）……22
　　10号掘立柱建物跡（SB10）……24
　　11号掘立柱建物跡（SB11）……25
　　12号掘立柱建物跡（SB12）……26
　　13号掘立柱建物跡（SB13）……27
　　14号掘立柱建物跡（SB14）……27
　　15号掘立柱建物跡（SB15）……28
　　16号掘立柱建物跡（SB16）……29
　　17号掘立柱建物跡（SB17）……30
　　(2)　土坑……31
　　1号土坑（SP225）……31
　　2号土坑（SP379）……32

(3) 井戸……34
1号井戸（SE01）……34
2号井戸（SE02）……36
3号井戸（SE03）……36
4号井戸（SE04）……39
5号井戸（SE05）……39
6号井戸（SE06）……39
7号井戸（SE07）……42
8号井戸（SE08）……49
9号井戸（SE09）……49
(4) 溝状遺構……50
1号溝状遺構（SD01）……50
2号溝（SD02）……69
3号溝・4号溝（SD03・SD04）……69
5号溝（SD05）……69
6号溝（SD06）……69
(5) その他の出土遺物……70

第三章 まとめ……74
1．掘立柱建物跡……74
2．井戸……74
3．溝状遺構……74
4．比恵58次調査出土の旧石器時代資料（吉留秀敏）……75

第一章　はじめに

1．発掘調査にいたる経過

平成7年5月25日、福岡市建築局住宅建設部住宅改良課より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市博多区博多駅南4丁目所在の市営小林町第3住宅立替に関わる埋蔵文化財事前調査願いが提出された。申請地は、弥生時代の集落遺跡として著名な比恵遺跡群のほぼ中央部にあたり、隣接地でもこれまでに数次の発掘調査が実施されていた。事前調査願いを受け付けた埋蔵文化財課では、まず試掘調査が必要であると判断し、その旨を回答した。

試掘調査は、既存建物の解体を待って、12月19日に実施した。その結果、削平が著しいものの現地表下130～140センチ前後の鳥栖ローム面で遺構を検出する事ができた。

これを受けた埋蔵文化財課では、開発計画は集合住宅の建設であり、基礎工事によって遺構が破壊されることは避けられず発掘調査が不可欠であると言う方針で、住宅改良課に回答し、協議にはいった。実は、住宅改良課では、西に隣接する小林町第1市営住宅、北西に位置する同第2市営住宅の立替に際して発掘調査を経験しており、発掘調査の実施には当初より理解が得られた。

結局、平成8年4月1日より3カ月の予定で発掘調査を行うことで同意がなった。発掘調査には、3月いっぱいまで博多区那珂遺跡群第56次調査を担当していた大庭康時があたることとなった。

平成8年7月26日に現地での最終打ち合わせ、同31日バックホーによる表土掘削、8月1日博多98次調査現場より調査機材を搬入し、発掘調査に着手した。

2．発掘調査の組織と構成

調査主体	福岡市教育委員会		教育長　町田　英俊
調査総括	同	埋蔵文化財課	課長　荒巻　輝勝
	同	第二係長	山口譲治
調査庶務	同	第一係	内野保基　（発掘調査）
			河野淳美　（整理報告）
調査担当	同	第二係	大庭康時

調査作業　石川君子　井口正愛　江越初代　大久保五枝　大久保学　太田みゆき
大庭智子　折茂由利　河野恒子　岸本祥子　北垣義克　渋村和憲
清水明　杉山正孝　関加代子　関義種　曾根崎昭子　都野浩之
永隈和代　長田嘉造　能丸勢津子　早川浩　宮崎タマ子　村崎祐子
吉田市芳　吉田清

3．調査地点の立地と歴史的環境

比恵遺跡群は、福岡平野のほぼ中央部に位置し、平野を北西方向に流れる御笠川と那珂川にはさまれた洪積台地上に立地している。この台地は、Aso-4火砕流堆積物を構成層とする須玖面とされ、中位段丘下面に相当する。

ところで、この台地は、現在は標高6メートルほどの平坦な市街地と化している。これは、1930年代の区画整理によるもので、本来は、小規模な開析谷が複雑に入り組んだ低丘陵であったと推測される。本調査地点は、台地の中央部に向かって東側から入り込んだ谷部の、北向きの傾斜面にあたると考えられる。

比恵遺跡群では、これまでの調査で弥生時代前期以降古墳時代にいたる集落遺跡が調査されている。縄文時代晩期末から弥生時代前期の遺構・遺物は、台地北側・西側の縁辺部に多く分布する。弥生時代中期になると遺跡は台地のほぼ全域に拡大する。ほぼ中央部には甕棺墓が営まれ、絹を巻いた細形銅剣が副葬されていた（第6次調査）。後期の溝状遺構には、集落を囲む環濠や方形区画をなすものが検出されている。青銅器の鋳型・取瓶も出土しており、青銅器生産が行われていたことはほぼ確実である。古墳時代後期では、大型の掘立柱建物群や柵列が見つかっており、日本書紀宣化天皇元年（536）条に見える「那津官家」との関連が論じられている。

比恵遺跡群の立地する台地は、見え隠れしながら南に続き、多くの貴重な遺跡をはぐくんできた。まず、比恵遺跡群のすぐ南には、浅い谷地形をはさんで、那珂遺跡群がある。那珂遺跡群では、縄文時代晩期、夜臼式土器段階の二重環濠が発見された。環濠集落の初源を示すものとして注目される。さらに弥生時代前期から後期にかけても大規模な集落が展開している。特に銅戈・銅剣の鋳型・鋳型中子の出土が示すように、弥生時代の青銅器生産の拠点のひとつと言うことができる。また、那珂遺跡群の範囲内には、前方後円墳である那珂八幡古墳・東光寺剣塚古墳が存在する。那珂八幡古墳は、古墳時代初頭に築造され、三角縁神獣鏡が出土している。東光寺剣塚古墳は、6世紀後半の古墳で、阿蘇凝灰岩の石屋形をそなえた横穴式石室を持つ。福岡平野の首長墓の最後のものと位置づけられている。

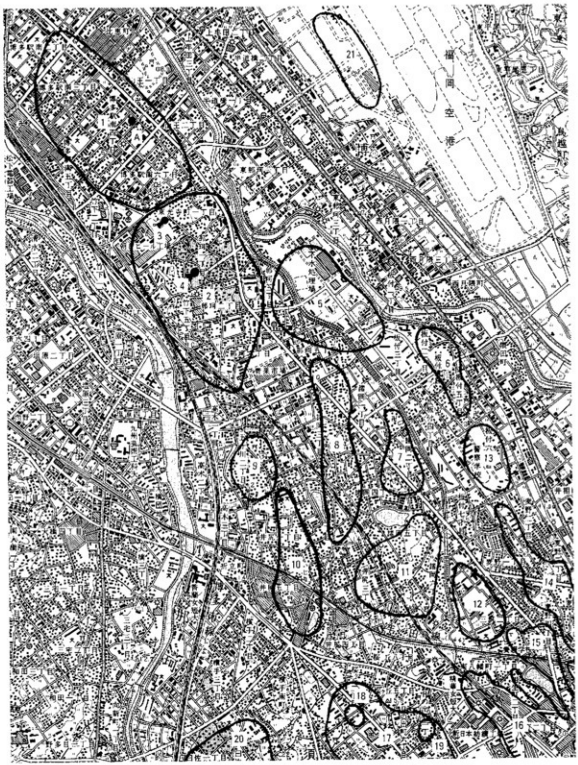
那珂遺跡群の南には、朝鮮系無文土器と弥生時代前期末の土器が共伴した諸岡遺跡がある。諸岡遺跡ではさらに、前期末から中期の集落、前期～後期前半の墓地が調査されている。

板付遺跡は、わが国最古の水田遺跡、弥生時代前期の環濠集落として、国指定史跡となっている。甕棺墓群も伴っており、前期末の甕棺から細形銅剣・銅矛が出土しているほか、後期の竪穴住居跡からは埋納されたと考えられる小銅鐸が出土している。

さらに南にたどると、近年調査成果を増しつつある井尻遺跡を経て、春日丘陵の遺跡群にたどりつく。これは、いうまでもなく「奴国」の中心遺跡である。「奴国」王墓とされる須玖岡本遺跡、青銅器工房とされる室町遺跡、鉄器工房の赤井手遺跡など貴重な成果を上げた遺跡は数多い。

人野城市と福岡市にまたがる仲島遺跡では、これまでに福岡市側で3次、大野城市側でも6次を越える調査が行われている。それによると、仲島遺跡は弥生時代中期前半から奈良時代、さらに鎌倉時代にわたる複合遺跡である。注目すべき遺構・遺物が多く、貨布（王莽銭）、後漢鏡片、青銅製鋤先、銅鏃、銅矛鋳型、滑石製模造品、人面墨書土器などが出土した。

御笠川を東にわたると、現在の福岡空港の敷地内で雀居遺跡が調査されている。縄文時代晩期から弥生時代の集落・墓地・水田遺跡で、短甲・盾などの武具をはじめ、机・斧の柄など極めて多様な木製品が出土している。



1. 比恵遺跡 A.58次調査 2. 那珂遺跡 3. 東光寺剣塚古墳 4. 那珂八幡古墳 5. 那珂君休遺跡
6. 板付遺跡 7. 諸岡A遺跡 8. 諸岡B遺跡 9. 五十川高木遺跡 10. 井尻B遺跡 11. 笹原遺跡
12. 三筑遺跡 13. 高畠遺跡 14. 麦野A遺跡 15. 麦野B遺跡 16. 雨八幡遺跡 17. 須玖遺跡群
18. 須玖唐梨遺跡 19. 須玖永田遺跡 20. 日佐遺跡 21. 雀居遺跡

Fig.1 比恵遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)

4．周辺の既往の調査

第58次調査地点の隣接地では、第２次・６次・35次・40次・44次・48次調査が既に行われている。以下、その概要について記す。

第２次調査（1952年）

小林町第１市営住宅の建築に際して、森貞次郎氏が福岡県・福岡市の委託を受けて実施した調査である。第６次調査の西南部と重複する。

環溝遺構１基、土坑３基、柱穴状のピット68基、甕棺墓18基以上を検出した。環溝遺構は、一辺がおよそ10メートルをはかるほぼ方形の溝遺構で、幅は0.6～１メートルをはかる。住居跡に伴うものと考えられてきた。この部分については、埋め戻した後、溝の輪郭を示す地上表示を設け、遺跡公館として現地保存されている。

第６次調査（1982年）

小林町第１市営住宅の立替に伴う発掘調査である。福岡市教育委員会が実施した。第２次調査と重複するが、現地保存がはかられた環溝部分は除いている。

弥生時代後期～古墳時代前期を主とする竪穴住居跡９軒、弥生時代後期以降の掘立柱建物跡22棟、弥生時代後期を主とする井戸50基、弥生時代中期前葉～後期初頭の甕棺墓44基、土壙墓７基が検出された。中期前葉の甕棺墓から、絹布が付着した細形銅剣が出土している。この甕棺墓については、吉留秀敏氏によって、墳丘墓の可能性が指摘されている。また、竪穴住居跡からは、ガラス小玉青銅製鋤先が出土している。

第35次調査（1990年）

民間の事務所ビル建設に伴う発掘調査である。福岡市教育委員会が調査した。

弥生時代の溝、柱穴群を検出した。溝は、弥生時代の中期終わり頃に埋没したもので、上部に後期の土器が混入したものと推測された。

なお、溝からは土器の他に、木製品・銅鏃（後期）などが出土している。

第40次調査（1992年）

民間の工場新築にともなって、福岡市教育委員会が発掘調査した。

弥生時代後期～古墳時代初頭にかかる遺構・遺物を調査した。掘立柱建物跡３棟、井戸７基、溝３条、土坑３基、柱穴76基を検出している。弥生時代後期後半の土製取瓶が出土しており、青銅器生産を示唆している。

第44次調査（1992年）

工場改築に伴う調査で、福岡市教育委員会が実施した。

弥生時代後期の井戸１基、古墳時代前期の井戸２基、不定形土坑６基を検出した。

第48次調査（1993年）

工場新築にともなって、福岡市教育委員会が発掘調査した。

弥生時代後期～古墳時代前期の掘立柱建物跡28棟、井戸29基、溝３条、土坑47基、柱穴198基を検出した。広形銅矛鋳型が出土している。

(1)『比恵遺跡　第６次調査・遺構編』福岡市埋蔵文化財調査報告書第94集　1983年

(2)『比恵遺跡群（11）』福岡市埋蔵文化財調査報告書第289集　1992年

(3)『比恵遺跡群（13）』福岡市埋蔵文化財調査報告書第368集　1994年

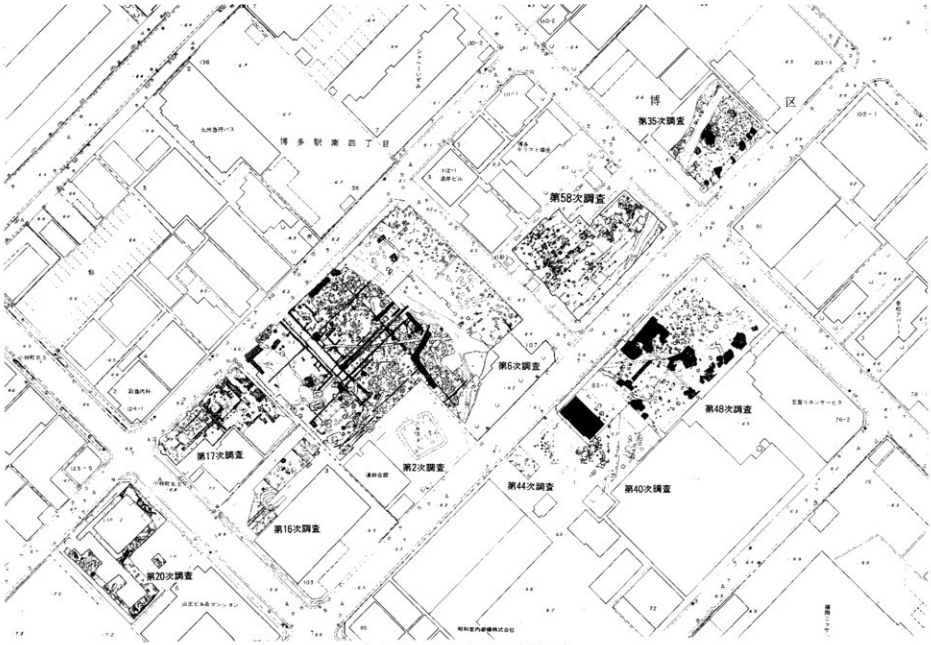


Fig.2 周辺調査地点配置図 (1/1,000)

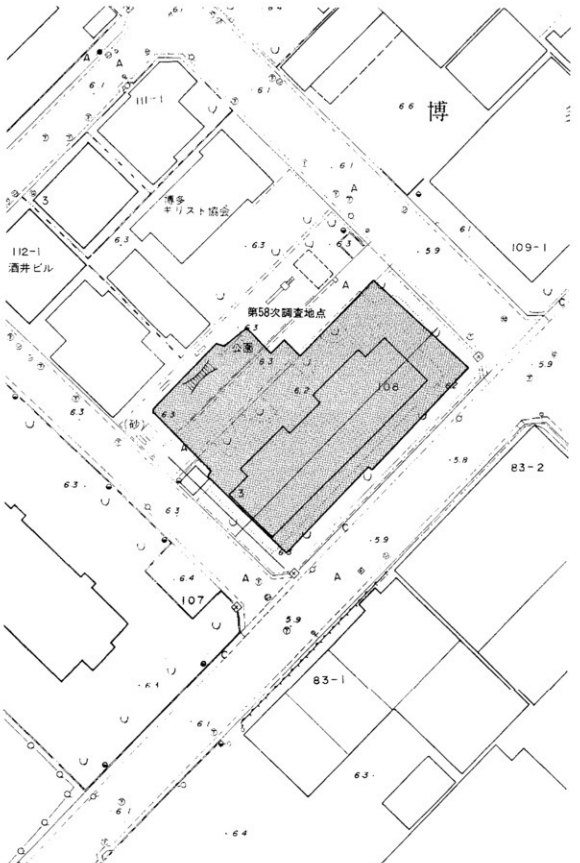


Fig.3 第58次調査地点位置図 (1/500)

第二章　発掘調査の記録

1．発掘調査の方法

発掘調査は、調査現場事務所部分を除いた申請地全面を対象として実施した。発掘調査によって生じる残土は搬出せず、場内で処理することが決まっていたため、周囲に安全のための引きを取った上で、調査対象地を三つに分け、順次調査を行った。

表土は、調査担当である大庭康時の立ち会いのもと、バックホーで除去した。これにあたっては、調査工程との兼ね合いから、包含層までを除去し、一気に遺構検出面まで露出させることにした。ただし、2区北側と3区北東側については、包含層が厚く、かつ大量の遺物が含まれていたため、重機で剥がず、人力で掘り下げることとした。

申請地は、かつての区画整理によって、鳥栖ローム層の上部まで削平されていた。したがって、遺構検出は、鳥栖ローム層中において行っている。遺構の遺存状態も悪く、柱穴の中には、検出面で既に礎板が露出していたものも多く、かなりの柱穴が既に失われたものと思われる。このような状況からみて、検出面を覆っていた包含層は、遺物としては弥生時代中・後期に限られてはいるが、二次的に堆積したものと見るべきであろう。

本調査では、掘立柱建物跡17棟、井戸9基、土坑・柱穴391基、溝状遺構6条を検出した。弥生時代中期末から後期を主とした遺構である。竪穴住居跡は全く検出されなかったが、削平によって失われた可能性を考慮する必要があろう。遺物は、弥生土器コンテナ182箱、石器など同1箱、木製品同56箱、銅鏃1点が出土した。

発掘調査は、1996年6月25日をもって終了した。申請面積1,200平方メートル、調査対象面積1,200平方メートルに対し、調査実施面積は736.2平方メートルである。

2．基本層序

調査区の層序は、基本的にはすべて同様であった。調査区の南西角で土層柱状図を作成しているので、Fig.4に図示する。

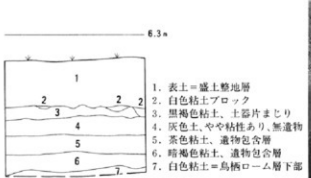


Fig.4　土層柱状図（1/40）

Ph.1　1区土層堆積状況

3．調査の概要

第58次調査で検出した遺構・遺物の概要について、各調査区ごとに述べる。

(1) 1区

申請地の南西部分にあたる。中央部分が、南西から北東に向けて、大きく削り込まれていた。

井戸8基、土坑・柱穴109基を検出した。今回の調査で検出した井戸のほとんどは、この1区から検出している。

以下、調査日誌風に経過を記す。

4月2日　バックホーで表土剥ぎを開始する。南隅から遺構検出・遺構精査を始める。

4月12日　福岡市役所の新人職員研修の一環として、男性新人職員一名を現場に受け入れる（14日までの三日間）

4月16日　福岡市教育委員会が設置した測量基準点から、標高を移してくる。実測基準杭設定。

4月17日　グリッド杭打ち。20分の1遺構平面実測図の割付図を作成する。

4月22日　1区全景写真撮影。実測開始。

4月25日　1区の周辺測量

4月26日　1区調査終了、埋め戻し

なお、調査中及び調査終了後の図上検討で、1区で4棟、1区と2区にまたがって1棟、1区と3区にまたがって4棟の、掘立柱建物跡を復元した。

Ph.2　1区全景（北東より）

Ph.3　2区全景（南西より）

Ph.4　3区全景（北より）

(2)　2区

鍵の手を呈した調査区の、北東側の部分である。検出面は大きく削平を受けているが、全体としては北角に向けて、ゆっくりと下降していく。本調査区の北側に、東から食い込んだ谷部があることは区画整理以前の地図からも知られ、遺構検出面の傾斜がそれを反映したものである蓋然性は高い。この傾斜部分には、土器を大量に包含する黒褐色粘土層が堆積していた。「2区北側包含層」として遺物を取り上げたが、区画整理による削平の甚だしさを考えれば、二次的な堆積層であることは明かである。

2区では、柱穴124基、溝状遺構6条を検出した。井戸は全く見られなかった。また、柱穴で礎板を持つものはほとんどなく、1区とは大いに異なっている。

以下、調査の経過を記す。

4月30日　2区表土剥ぎ開始。
5月9日　実測用のグリッド基準杭設定。
5月10日　2区の周囲を測量。
5月24日　1号溝状遺構付近を平板で実測（50分の1）。
5月28日　2区全景写真撮影。愛知県瀬戸市埋蔵文化財センター藤沢良祐氏来訪。
5月29日　遺構平面図実測。
6月3日　2区埋め戻し（6月4日まで）。

調査終了後の図上検討で、1区と2区にまたがった掘立柱建物跡1棟を検出した。

(3)　3区

1区の北西に隣接した調査区である。やはり全体に削平を受けているが、1区・2区に比べると、2～30センチほど削平が浅い。調査区の北西側と北東側で、検出面が下降して行くが、2区と同様に本来の地形を反映したものであろう。

3区では、柱穴・土坑158基、井戸1基を検出した。

以下、調査の経過を記す。

6月4日　3区表土剥ぎ開始。
6月6日　実測用グリッド基準杭設定。
6月19日　3区全景写真撮影。
6月23日　調査区周辺測量。
6月25日　3区埋め戻し。器材搬出。発掘調査終了。

なお、調査中及び調査後の図上検討で、3区で8棟、1区と3区にまたがって3棟の掘立柱建物跡を検出している。

4．遺構と遺物

以下、第58次調査で検出した遺構・遺物について、遺構の種類別に述べる。なお、時間的な制約から未だ完全な整理は終了しておらず、すべての遺構について詳述する訳には行かなかったことを、あらかじめ断っておきたい。なお、以下の記述において、見出しの遺構名の後ろに括弧で示した記号は、調査段階での遺構記号である。遺物の取り上げ・写真・実測図等の記録は、すべてこの遺構記号によっている。

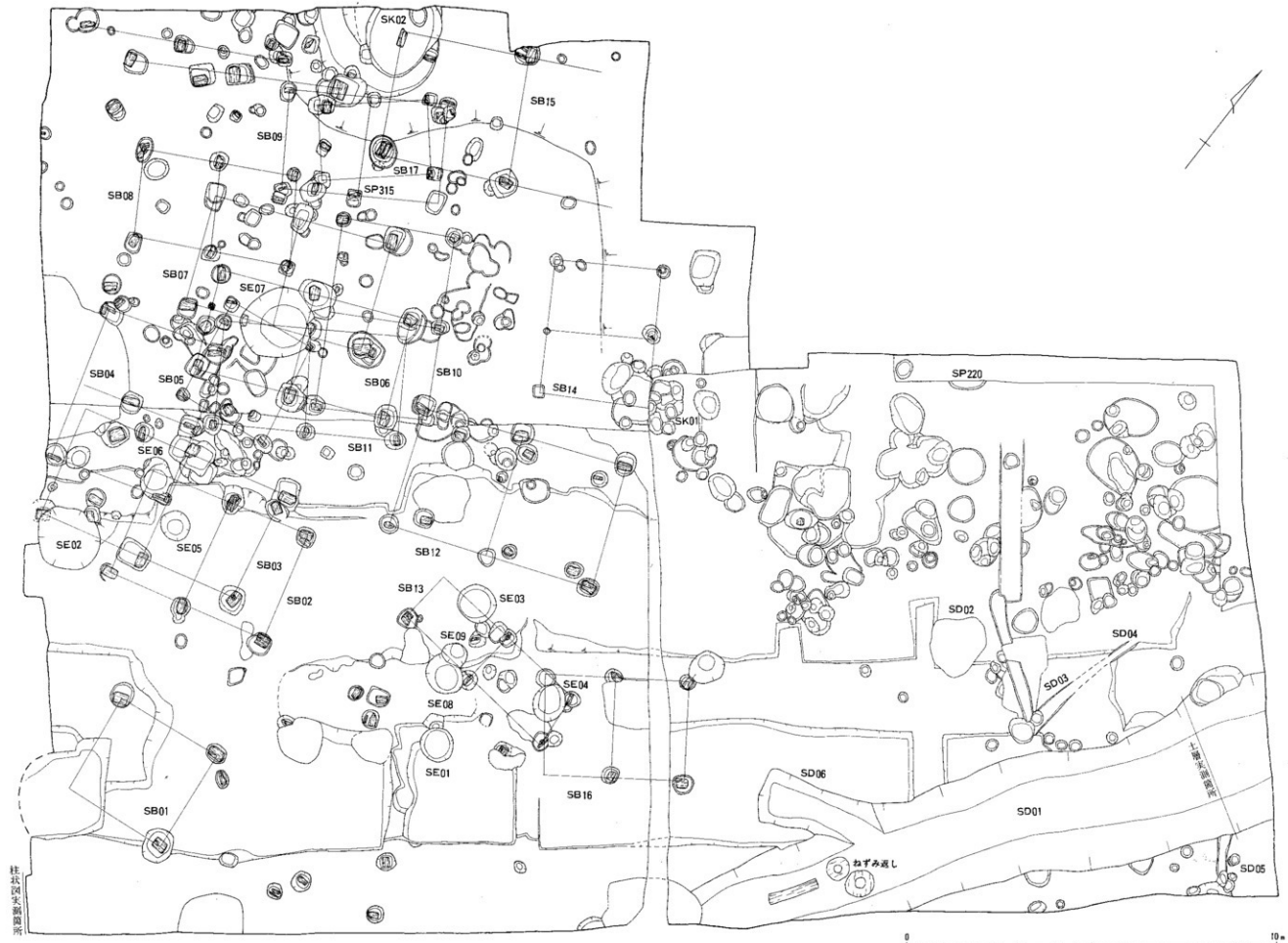
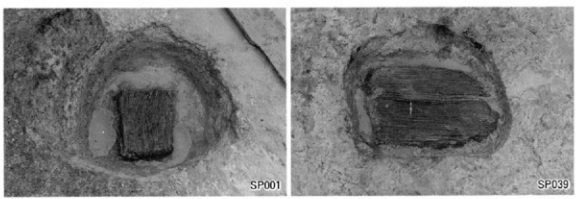


Fig.5 遺構全体図 (1/100)

(1) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（SB01）

調査区南角近くで検出した東西棟である。1間×1間分を検出したが、西側の調査区外に延びる可能性は高い。なお、北西角の柱穴は、撹乱坑のため失われている。SP001とSP037から弥生時代後期初頭頃の土器片が出土している。



Ph.5　1号掘立柱建物跡柱穴

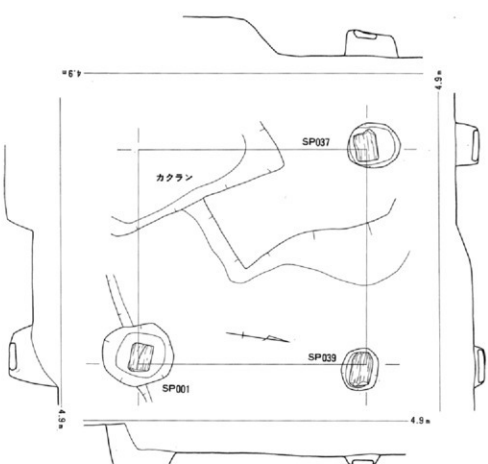
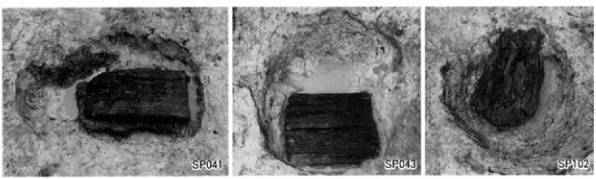


Fig.6　1号掘立柱建物跡実測図（1/50）



Ph.6　2号掘立柱建物跡柱穴

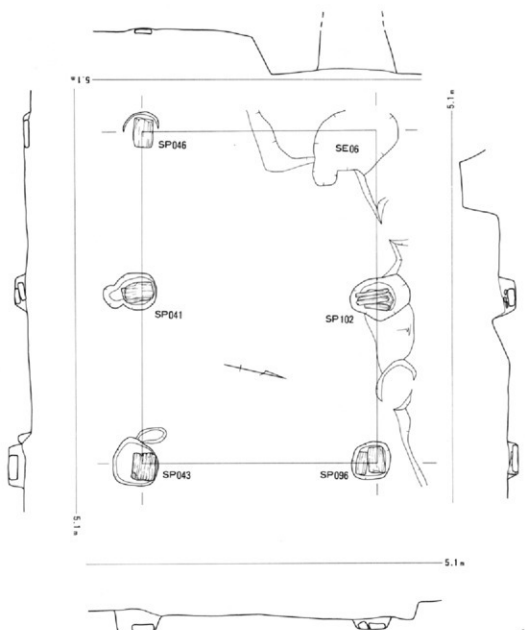


Fig.7　2号掘立柱建物跡実測図（1/50）

2号掘立柱建物跡（SB02）

1間×2間の東西棟である。北西角の柱穴は、6号井戸に切られ欠いている。SP043、SP120から弥生時代後期の「く」字状口縁の甕片が出土している。

3号掘立柱建物跡（SB03）

1間×2間の東西棟掘立柱建物跡である。北西角の柱穴を、撹乱のため欠く。また、南西の柱穴は、2号井戸に掘り方の一端を切られている。南辺中央の柱穴は、掘り方の中央を台状に掘り残している。南東角の柱穴には、柱根が残っていた。柱は朽ちて傾いているが、一部に表皮をとどめており、復元すると柱径は17.6センチとなる。

SP008、SP021、SP032、SP044、SP045から弥生時代後期の土器片が出土している。SP021とSP032出土の壺破片が接合できた。底部は膨らみ気味の平底、口縁は鋭く「く」字状に内折した袋状口縁で、後期中頃であろう。

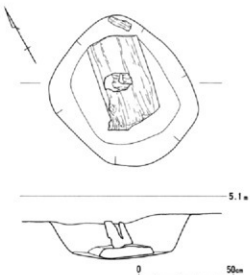
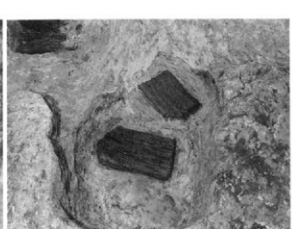


Fig.8　SP044実測図（1/20）

Ph.7　3号掘立柱建物跡 SP044柱根遺存状況



Ph.8　3号掘立柱建物跡柱穴

4号掘立柱建物跡（SB04）

調査区南西辺にかかるため、全体を知り得ない。東辺を梁として桁行きが西の調査区外に延びる東西棟とみるか、西辺の中柱が撹乱で失われているものとして、南北棟とするか、二通りの復元が可能である。建物規模としては、東西棟とすると他と比べ大型に過ぎる感があり、南北棟の可能性が高いように考える。礎板には、薄板を用い、2枚をT字形に置くなどの工夫がみられる。南東角の柱穴が6号井戸を切る。SP327からは、弥生時代後期後半の高坏片や壺底部が出土している。

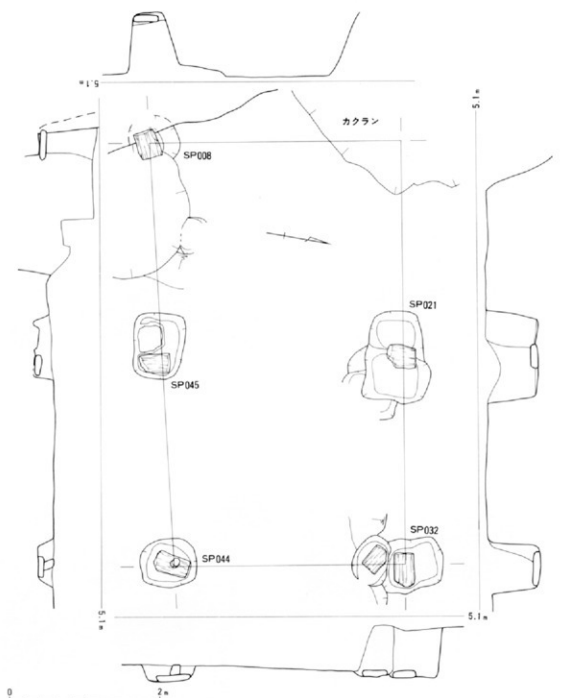
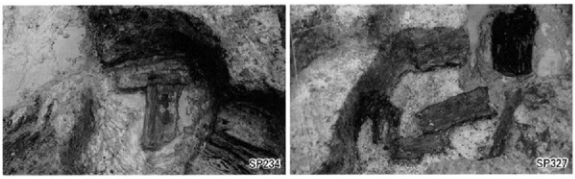


Fig.9　3号掘立柱建物跡実測図（1/50）



Ph.9　4号掘建柱建物跡柱穴

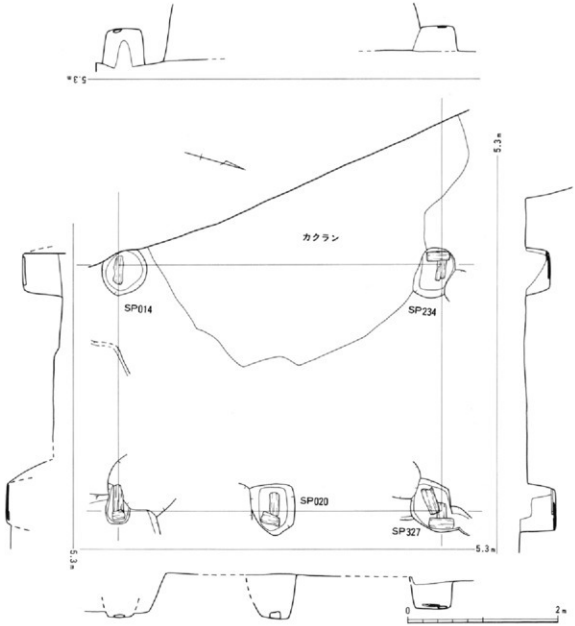


Fig.10　4号掘立柱建物跡実測図（1/50）

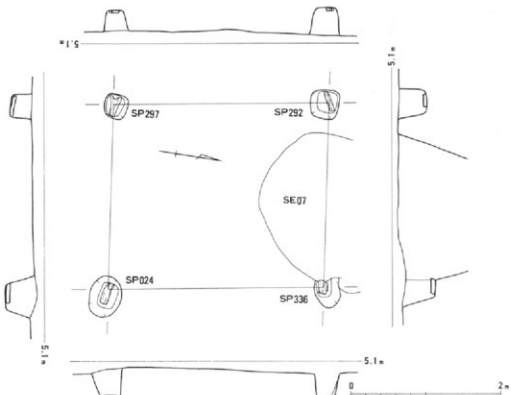
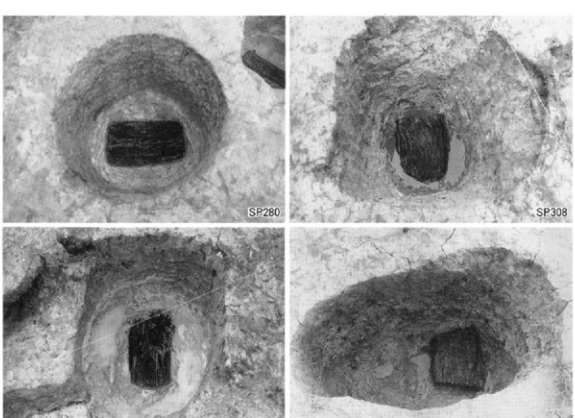


Fig.11　5号掘立柱建物跡実測図（1/50）



Ph.10　6号掘立柱建物跡柱穴

5号掘立柱建物跡（SB05）

1間×1間の南北棟である。北東角の柱穴は、7号井戸に切られて、その一部を失っている。柱穴は全体に小さく、礎板も幅の狭い板材を一枚敷いただけの簡単な作りである。土器の小片は出土しているが、時期を示す遺物はない。

6号掘立柱建物跡（SB06）

1間×2間の東西棟である。北辺の中柱が10号掘立柱建物跡を、北西角の柱穴が11号掘立柱建物跡を切る。南西角の柱穴には、柱根が残っていた。礎板の隅ぎりぎりに据えられたもので、直径25セン

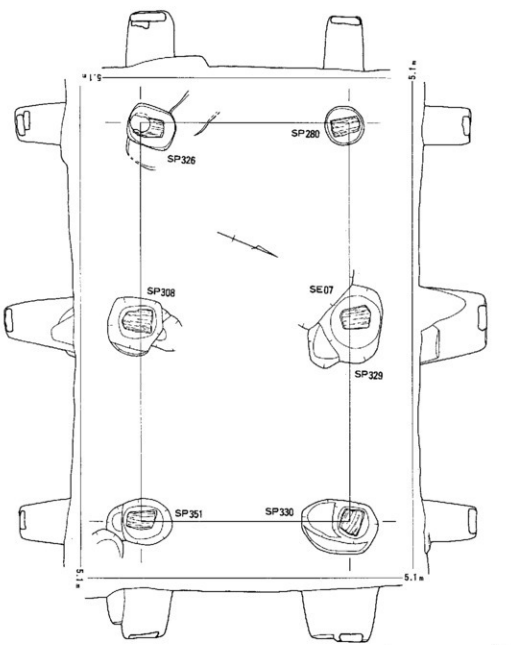


Fig.12　6号掘立柱建物跡実測図（1/50）

チをはかる。SP280、SP308、SP329、SP351から弥生時代後期初頭から前半の土器片が出土している。また、SP329から Fig.54-28に図示した石鏃片が出土した。

7号掘立柱建物跡（SB07）

1間×2間の東西棟である。南辺の中柱は、7号井戸に切られ存在しない。また、北辺の中柱は、半面実測後、降雨と湧水のために冠水し、水を汲み出してレベルをとろうとしたところ、既にバラバラに破損していた。北西角の柱穴には、礎板は認められなかった。SP277、SP294、SP309、SP317から弥生時代後期初頭と思われる土器片が出土している。

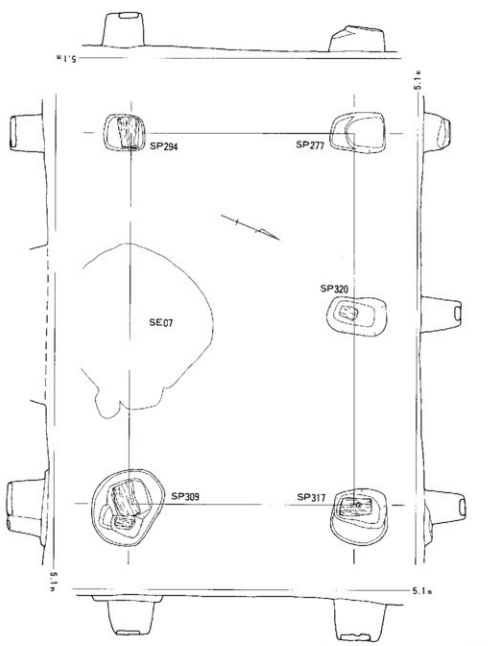
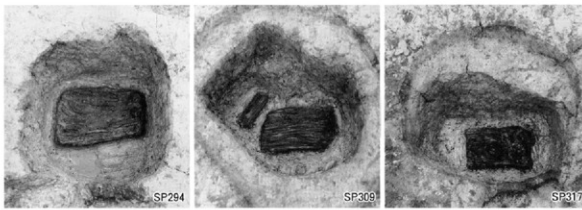


Fig.13　7号掘立柱建物跡実測図（1/50）



Ph.11　7号掘立柱建物跡柱穴

8号掘立柱建物跡（SB08）

1間×2間の東西棟である。柱穴の配置が若干いびつで、整った長方形は呈さない。柱穴の深さも不揃いで、東側で浅く、西側で深い傾向が見受けられる。本遺構の場合この傾向が顕著であるが、これまで述べてきた東西棟にもおおむね認められる傾向である。おそらく、区画整理による削平を受ける以前の、本来の地形の傾きを反映したものであろう。

南東角のSP290と、北西角のSP249において、柱根が残っていた。SP290の柱根は、礎板の北端に据えられたものである。朽ちているためか、丸材らしい体裁を見せず、長辺15センチ、短辺10センチ程度の角材のような形を示す。SP249の柱は、礎板2枚を敷いた上に、丁度その両方にまたがるよう

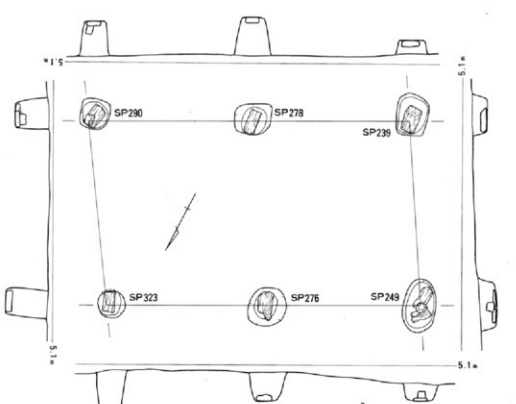


Fig.14　8号掘立柱建物跡実測図（1/50）

に据えられていた。柱材は朽ちて先細りになっており、柱径はその基部で約12センチをはかる。北辺の中柱であるSP276の礎板は、一端が木の枝の付け根部分にあたり、斜め上に突き出ている。8号掘立柱建物跡は、柱間がやや小さ目で、礎板も薄く小振りである。

すべての柱穴から土器片が出土している。甕の底部破片を見ると、完全な平底のものと、平底の角がやや甘くなって底部中央が下に膨らみかけた段階のものとがある。口縁部の破片にも、逆L字形を呈するものと、「く」字状に折れ曲がるものとが見られる。弥生時代中期末から後期初頭の特徴を示していると思われる。

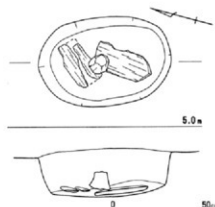
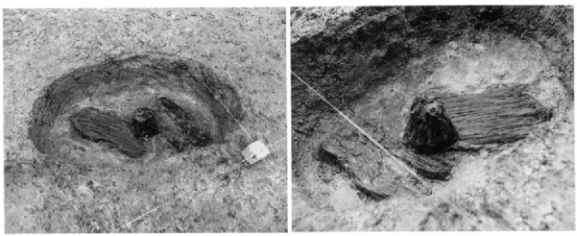
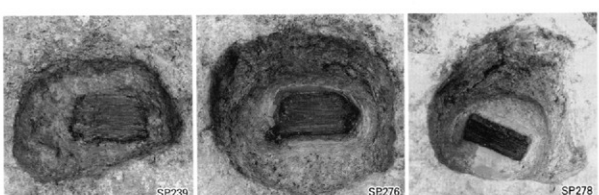


Fig.15 SP249実測図 (1/20)


Ph.12 8号掘立柱建物跡、SP249柱根



Ph.13 8号掘立柱建物跡柱穴

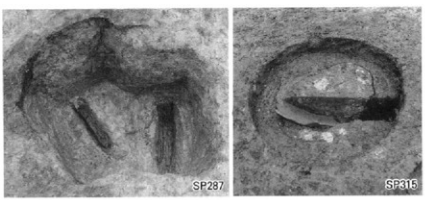
9号掘立柱建物跡（SB09）

1間×2間の東西棟である。北辺の柱穴は、すべて後述する2号土坑に切り込んで掘られているが、調査時には2号土坑の埋土除去後に検出している。ただし、北辺の中柱と南辺の中柱の位置は対応しない。また、柱穴の掘り方はおおむね長方形を呈するが、北辺の中柱のみ円形を呈しており、SP378が9号掘立柱建物跡に伴わない可能性もある。

南辺の中柱であるSP315は、柱を抜き取った後白色粘土をつめ、この中に甕破片を埋め込んでいた。埋土中からこれと同一個体の破片は出土しておらず、最初から破片であったものを埋め込んだこ

とが知れる。柱抜き取りの際に、祭祀的行為をともなったものであろうか。実測図をFig.53-18に図示する。口縁は横なで調整、体部外面は縦刷毛目調整、体部内面の上半は斜め刷毛目調整、下半はなで調整する。

この他、SP268、SP315、SP325、SP383から弥生時代後期前半の土器片が出土している。



Ph.14　9号掘立柱建物跡柱穴

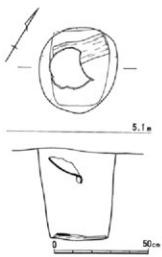


Fig.16　SP315実測図（1/20）

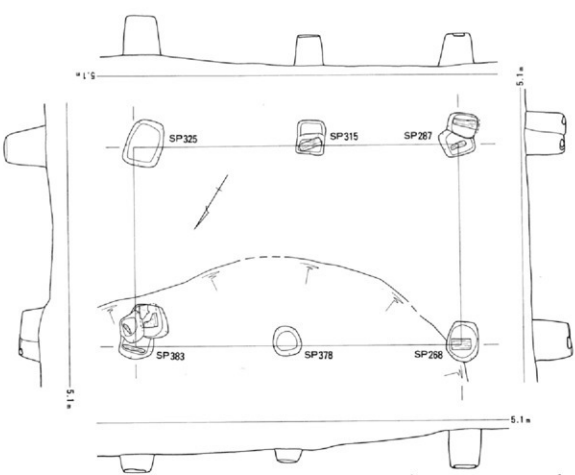


Fig.17　9号掘立柱建物跡実測図（1/50）

10号掘立柱建物跡（SB10）

1間×2間の南北棟である。6号掘立柱建物跡と12号掘立柱建物跡に切られる。南東角のSP353と西辺の中柱では、礎板は残っていなかった。ともに前述の建物の柱穴と重複したもので、切られた際に抜き取られた可能性を考えたい。

SP318、SP350、SP365などから弥生土器片が出土した。鋤先状の壺口縁や甕の逆「L」字状口縁片など中期の特徴を示すものも見られるが、若干丸みを持ち始めた平底の底部などもあり、後期初頭とするのが妥当と思われる。

Ph.15　SP350（南東より）

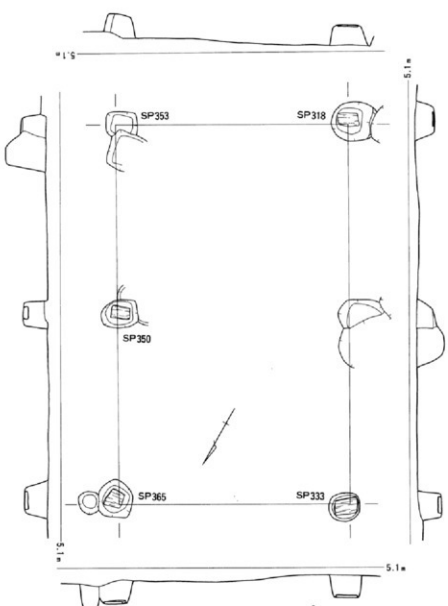
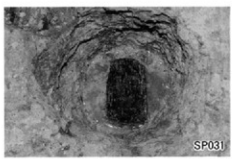


Fig.18　10号掘立柱建物跡実測図（1/50）

11号掘立柱建物跡（SB11）

1間×2間の東西棟である。北辺の中柱は、7号井戸に切られ、2分の1弱を失っている。また、北東角の柱は、6号掘立柱建物跡の柱穴に切られる。各礎板には板材が用いられているが、南辺の中柱であるSP027の礎板は、ちょうど木目が歪曲した部分を使っており、礎板自体も湾曲している。

SP027、SP031、SP295から弥生時代中期後半～後期初頭の土器片が出土している。



Ph.16　SP031（南東より）

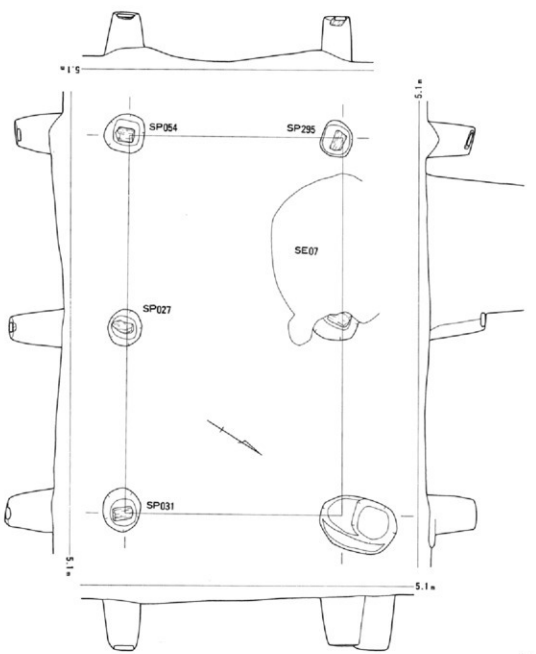


Fig.19　11号掘立柱建物跡実測図（1/50）

12号掘立柱建物跡（SB12）

1間×2間の東西棟である。北西角の柱穴SP352は、10号掘立柱建物跡の柱穴を切っている。また、南辺の中柱であるSP094には、礎板は残されていなかった。

SP064、SP107、SP352から弥生土器片が出土した。中期の甕口縁なども見られたが、甕の口縁では「く」字形に屈折するものが多く、壺には稜を持って逆「く」字形に内折する袋状口縁部がみられた。底部も丸みを持った平底で、後期中頃と思われる。

Ph.17　SP064（北西より）

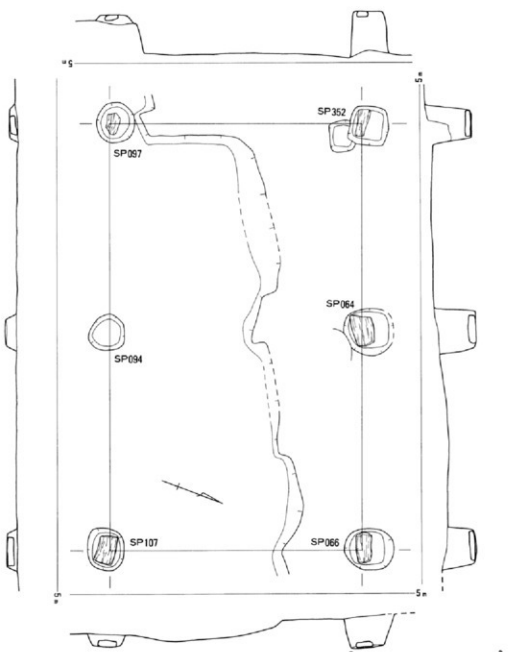


Fig.20　12号掘立柱建物跡実測図（1/50）

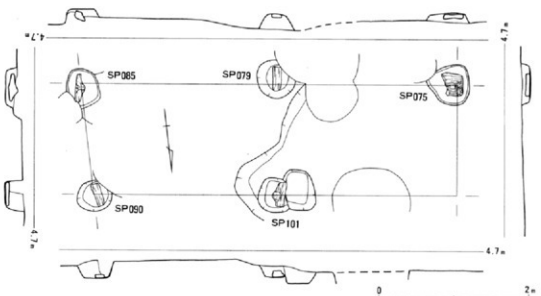


Fig.21　13号掘立柱建物跡実測図（1/50）

13号掘立柱建物跡（SB13）

1間×2間の東西棟である。北西角の柱穴を欠くが、これは削平によって飛ばされたものと推測される。梁間の狭い建物で、桁行きの1間に対して0.5間の梁間しかない。他の掘立柱建物とは、性格を異にする可能性もあろう。また、礎板に幅の狭い板材を用いているのも特徴で、特にSP085やSP101では節の部分が使われている。意図的に節の部分を礎板中央に持ってきたのか否かは疑問だが、特徴的な使い方とは言えよう。

SP075、SP101で、弥生時代後期の土器片が出土している。

14号掘立柱建物跡（SB14）

1間×2間の南北棟である。礎板を置かない建物で、柱穴も小さい。SP343で柱材の一部が、SP344で柱痕跡が見られた。桁行きに対し、梁方向の柱間が広く、プラン的にもややいびつである。全体的に小型の建物といえる。SP341、SP343、SP344から弥生時代後期前半の土器が出土している。

Ph.18　14号掘立柱建物跡 SP343柱根

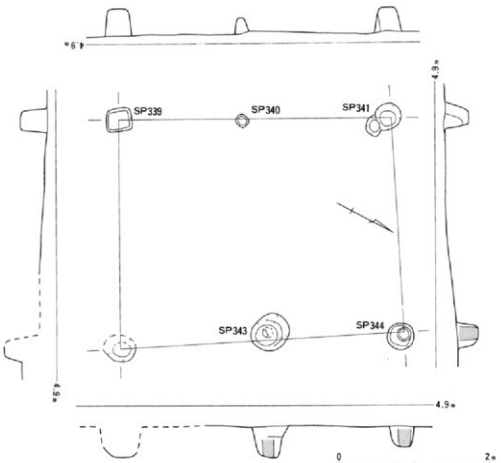
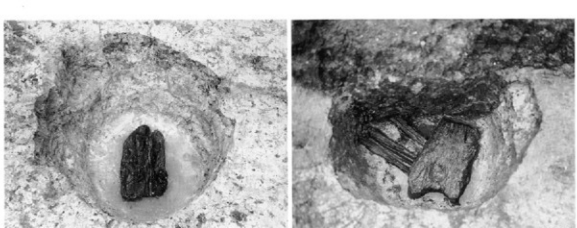


Fig.22　14号掘立柱建物跡実測図（1/50）

15号掘立柱建物跡（SB15）

1間×1間分を検出しているが、北もしくは東側の調査区外に延びる可能性がある。全体に東西棟が多いということを考え合わせれば、東に延びて1間×2間の東西棟となる可能性がより高いといえよう。北西角の柱穴は、後述する2号土坑の埋土中に掘り込まれていた。SP324、SP332、SP385から土器片が出土しており、弥生時代後期前半に属するものと思われる。



Ph.19　15号掘立柱建物跡柱穴

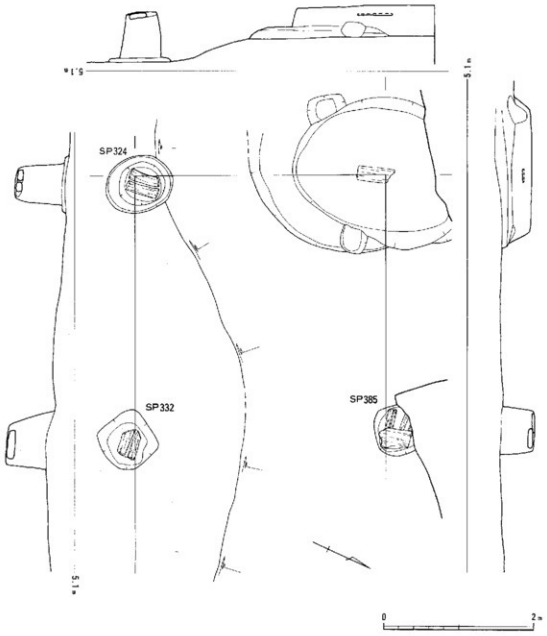


Fig.23　15号掘立柱建物跡実測図（1/50）

16号掘立柱建物跡（SB16）

1間×2間の東西棟である。南西角の柱穴を欠くが、削平によって失われたものと見たい。北辺の中柱は、攪乱坑に切られ、その一部を失っている。東半分の1間×1間分の4基の柱穴には、礎板が掘えられていた。南東角の礎板は桁行きに平行に置かれているが、他の三基の礎板は放射状に掘えられている。

SP087、SP110、SP130から弥生土器片が出土している。甕の口縁には、逆「L」字形を呈するものと、「く」字形に外折するものとがある。底部は、べったりとした平底である。これらの特徴からみて、弥生時代中期末から後期初頭に位置づけるのが妥当であろう。

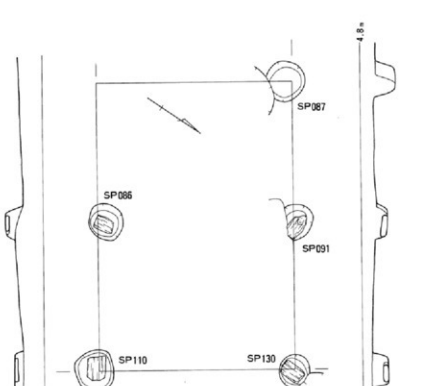
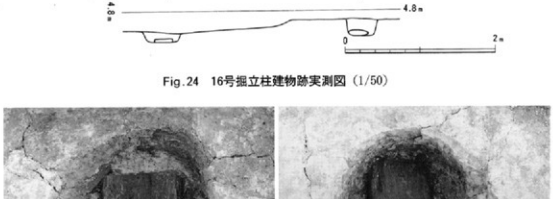


Fig.24　16号掘立柱建物跡実測図（1/50）



Ph.20　16号掘立柱建物跡柱穴

17号掘立柱建物跡（SB17）

1間×1間の東西棟である。ただし、桁行き・梁間ともに他と比べて狭く、建物として認定するのに疑問があり、遺構実測図としては図示していない。Fig.5の遺構全体図に推定線のみ引いているので、参照していただきたい。柱穴は方形を呈する。SP371の礎板にはほぞ穴が見られ、建築材を薄く削って転用したものと知れる。

SP322、SP371、SP381から弥生時代後期前半に位置づけられる土器片が出土している。

(2) 土坑

ここで土坑と呼ぶのは、溝状遺構・井戸・柱穴など用途・機能が特定されたもの以外の掘り込み遺構を指す。本調査では、17基の土坑を検出した。そのほとんどが、2区の北側から検出されている。ここは、地形的には、調査地点の北側の谷部分に傾斜を強めていく部分にあたり、意図的な選地がなされたことをうかがわせる。ただし、土坑の性格は不明瞭で、漠然と廃棄土坑などを想定している。

本節では、そのすべてを報告することはできないので、遺物の出土がめだった2基の土坑について報告する。

1号土坑（SP225）

2区と3区にまたがって検出した不整形の土坑である。底面は凹凸が激しく、また前述した14号掘立柱建物跡の柱穴が掘り込まれるなど、数基の遺構の重複と見られる要素もある。この南側の一部分に、弥生土器が集中して廃棄されており、SP225として一括して取り上げたので、これについて報告する。

Ph.21　1号土坑出土土器

Fig.25-1は、小型の甕である。外面は縦刷毛目、内面はなで上げる。2・3は、袋状口縁の壺である。口縁の袋状部分の丸みは強く、口径は広い。頸部は短く、若干肩が張る。2の頸部の付け根には、一条の突帯が巡る。3の底部は歪んで形が崩れているが、丸みを持った平底と言えよう。3は器表が摩滅して調整痕が残らないので、2について見ると、内外とも刷毛目調整し、頸部から口縁部にかけ

Ph.22　1号土坑遺物出土状況（北より）

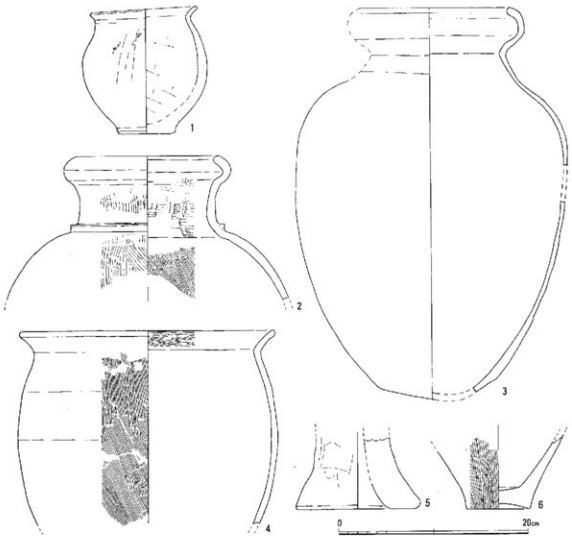


Fig.25　1号土坑出土遺物実測図（1/4）

ては横方向のなで調整を加えている。4は、甕である。体部外面は縦刷毛調整、内面はなで調整、口縁部は横なで調整するが、内面には横刷毛調整が残る。5は、器台である。指押さえで成形する。6は、甕の底部であろう。外面は縦刷毛目、内面はなで調整する。

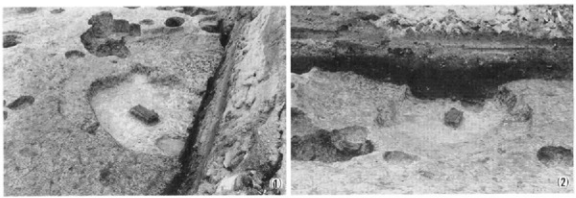
弥生時代後期前半の土坑といえよう。土器を見る限りでは、祭祀性は感じられない。

2号土坑（SP379）

3区北西壁にかかって検出した、大型の土坑である。緩やかな掘り込みだが、途中で急角度で深さを増し、二段掘り状となる。ほぼ中央に板材がみられるが、これは土坑埋土中に掘り込まれた、15号掘立柱建物跡の柱穴の礎板である。

出土遺物を、Fig.27に示す。1は、小型の壺である。胴部外面は丁寧に篦磨きされる。底部近くは、縦に削る。口縁部の内外には、目の細かい刷毛目が残る。内面は、指押さえとなで調整される。胴部中ほどに、穿孔がなされる。2～4は、甕である。逆「L」字形の口縁を呈する。5は、甕の底部であろう。外面には、粗い刷毛目がみられる。6は、高坏の脚である。

これらの遺物から、弥生時代中期中頃の土坑と思われる。



Ph.23　2号土坑　(1)北東より　(2)南東より

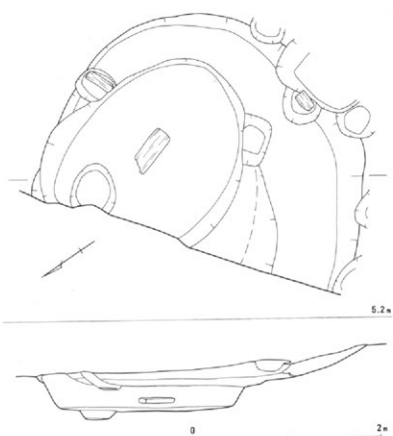
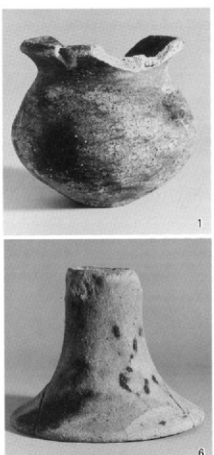


Fig.26　2号土坑実測図（1/40）



Ph.24　2号土坑出土遺物

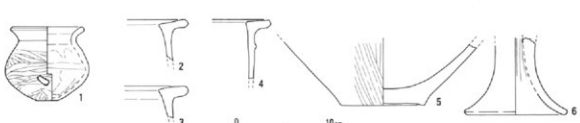


Fig.27　2号土坑出土遺物実測図（1/4）

(3) 井戸

第58次調査では、9基の井戸を検出した。今回の調査で井戸と認定したのは、円筒形の掘り方を持ち、他の遺構と比較して深く掘り込まれている土坑である。いずれも素掘りで、井戸枠を示す何等の施設も認められない。掘り込みは八女粘土層の上部で止まっており、八女粘土層が青灰色シルトに変わる部分まで掘り込んだものはなく、この部分にみられる湧水による巾着状の抉れを持つものはなかった。分布的には、調査区の南西部分に集中している。調査区南側の東寄りに集中する群(SE01, 03, 04, 08, 09)、南西辺付近の一群(SE02, 05, 06)、調査区西側のSE07の三群にくくることができる。

1号井戸(SE01)

調査区南側東寄りで検出した。直径1.2～1.25メートルの略円形を呈し、底面の標高は2.9メートルをはかる。壁は、ほぼ直立する。

出土遺物をFig.32-1～6に示す。1は、壺である。屈曲部の丸みに稜線が付いた袋状口縁を持つ。2は、高坏の口縁部片であろう。3・4は鉢である。5は、甕である。口縁は、「く」字形に屈曲する。6は、器台の裾部である。これらの土器は、弥生時代後期前半に位置づけられよう。

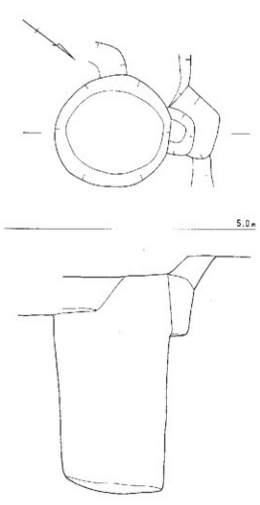


Fig.28 1号井戸実測図(1/30)

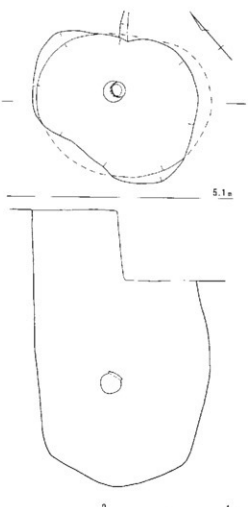


Fig.29 2号井戸実測図(1/30)

Ph.25　1号井戸（東より）

Ph.26　2号井戸（西より）

2号井戸（SE02）

調査区南西壁際で検出した。長径1.8メートル、短径1.3メートルの楕円形を呈する。底面の標高は2.8メートルだが、湧水による壁の崩落が激しく、壁面と底面の形状はやや不確実である。

埋土中程より、壺形土器が出土した。Fig.32-7に図示する。やや開き気味に直立する短頸で、底部は尖り気味の丸底である。外面の底部付近は篦削り、上半は刷毛目で、内面は内底部で篦削り、上半は板状工具で滑らかになで調整する。弥生時代後期終末に属するものと思われる。

Ph.27　2号井戸出土土器

3号井戸（SE03）

調査区南側の東寄りから検出した。直径1.3～1.4メートルの略円形を呈し、底面の標高は、3.02メートルをはかる。壁はほぼ直立して、円筒状となる。

出土遺物の一部をFig.32-8～10に示す。8・10は、甕である。口縁は、逆「L」字形に屈折する。9は壺である。口縁端部に粘土帯を貼り付け、幅の狭い鍔状に作る。これらの土器はいずれも器表が摩滅しており、器面調整痕は残らないか、微かに見える程度である。この他、平底の甕底部破片などが出土している。おおむね、弥生時代中期後半に位置づけられよう。

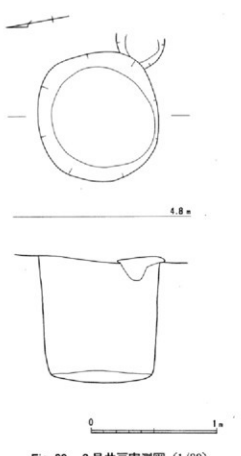


Fig.30　3号井戸実測図（1/30）

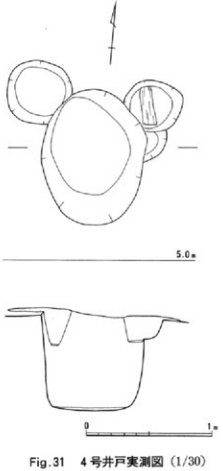


Fig.31　4号井戸実測図（1/30）

Ph.28　3号井戸（西より）

Ph.29　4号井戸（北より）

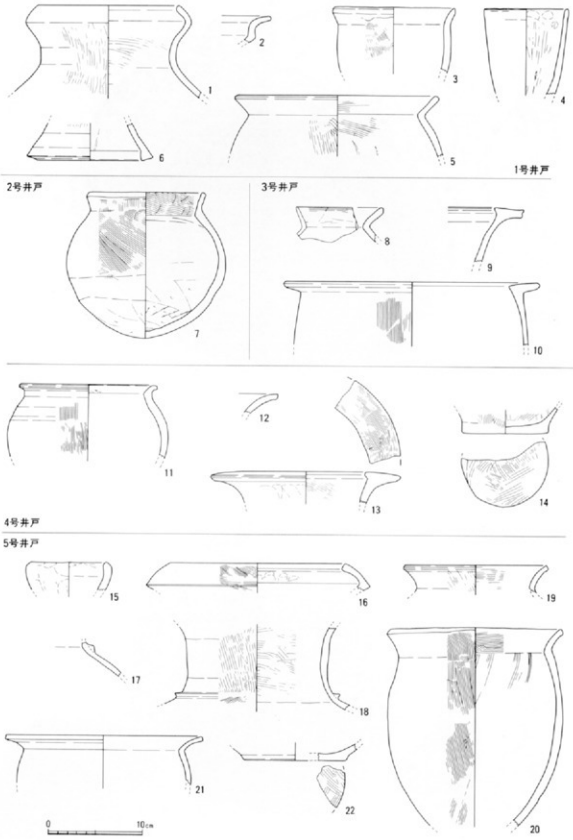


Fig.32　1～5号井戸出土遺物実測図（1/4）

4号井戸（SE04）

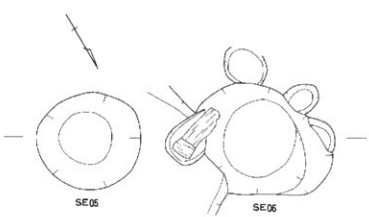
調査区南側の東寄りから検出した。長径1.46メートル、短径1.12メートルの楕円形を呈し、底面の標高は3.38メートルをはかる。壁はほぼ直立する。

出土遺物の一部を、Fig.32-11～14に示す。11は、短頸壺である。内面はなで調整、外面は縦刷毛目調整する。12は、甕の口縁である。内外面とも摩滅しており、調整痕は残っていない。13は、鉢状口縁の壺である。内面と口縁上面は刷毛目調整、外面はなで調整する。14は、壺もしくは甕の底部である。内外面及び外底部は、刷毛目調整である。弥生時代中期後葉に属する。

5号井戸（SE05）

調査区南西辺近くから検出した。直径1.06～1.1メートルの略円形を呈し、底面の標高は2.9メートルをはかる。壁はややラッパ状に開く。

出土遺物をFig.32-15～22に示す。15は、手捏ねの盃である。指押さえの痕跡が全面に残り、内面はなで調整で平滑に整える。16～18は、壺である。16は、袋状口縁部である。鋭い稜を作って内折した口縁部は、丸みを持って内湾する。外面は刷毛目調整、内面には指押さえ痕が並ぶ。17は肩部、18は頸部である。内外とも刷毛目調整で、頸部の付け根に突帯を貼り付ける。19～21は、甕である。口縁は「く」字形に折り返す。19・20の外面は縦刷毛調整、口縁部内面は横刷毛調整、体部内面は縦になで上げる。21の器壁は摩滅しており、調整痕は残らない。22は、壺の底部であろう。内面はなで調整、底部外面は刷毛目である。出土遺物からみて、弥生時代後期中頃であろう。



6号井戸（SE06）

調査区南西辺近くから検出した。長径1.5メートル、短径1.2メートルの楕円形を呈し、底面の標高は2.34メートルをはかる。壁はほぼ直立し、標高4メートル付近からラッパ状に開く。4号掘立柱建物跡の柱穴に切られている。埋土上位には、礎板状の板材が多量に廃棄されていた。また、埋土下位からは、木製柄杓が出土している。

出土遺物は少なく、Fig.34

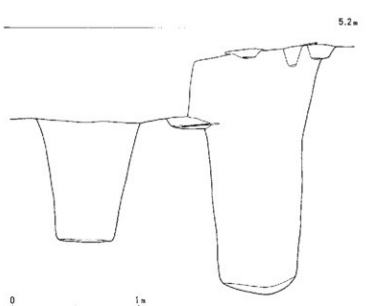


Fig.33　5号・6号井戸実測図（1/30）

Ph.30　6号井戸（北西より）

に図示した程度しか出土していない。1は、埋土下位から出土した壺である。緩く外反する口縁を持ち、下膨れの体部にやや丸みを持った底部を作る。器形は整わず、全体に手捏ねを思わせるような歪がみられる。外面は粗い縦刷毛調整、内面から口縁はなで調整である。2は、袋状口縁壺である。大きくラッパ状に開いた頸部から、鋭く反転して直線的に内折した口縁を作る。頸部の付け根には、低い突帯が巡る。内外面とも刷毛目調整で、口縁内面には指頭圧痕が並ぶ（Ph.31）。3は、木製の柄

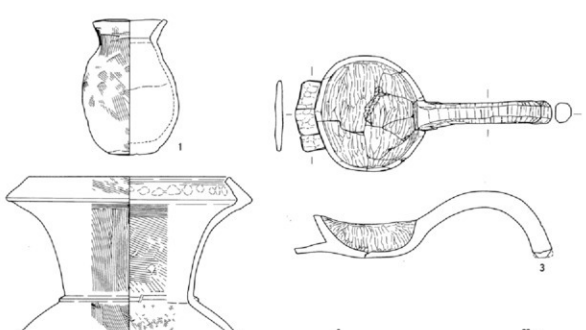


Fig.34　6号井戸出土遺物実測図（1/4）

杓である。一木から削りだしたもので、完形品であるが、井戸の掘り下げ時に破損してしまった。杓部は、丸く深みのある椀形を呈し、先側の縁は、わずかに山形に削り出す。杓部の先端の下部には、鰭状の部分が作られている。鰭状部分は、ばち形に開き、先端は山形を呈する。柄は大きく弧を描き、先端は平に削り落とす。成形は、すべて細かい削りによっており、特に杓部は幅の狭い横長の削りが並んでいる。柄は、幅の狭い削りが縦に並び、全体としては断面が不整八角形を呈する。縦断面を見ると、鰭状部分は丸みを持った杓部の底近くから下反り気味に延びている。湾曲した柄と鰭状部を容器の縁にかけ、落下を防ぐなどの機能が想像できる。

前述した袋状口縁壺などから、弥生時代後期後半に位置づけられよう。

Ph.31　6号井戸出土遺物

7号井戸（SE07）

調査区西側から検出した。他の井戸と違って、分布的には群をなしていない。また、長径2.7メートル、短径2.5メートルの卵形を呈し、一回り大型の井戸である。底面の標高は、2.65メートルをはかる。壁は北東でほぼ直立、南西でやや開き気味となる。5号掘立柱建物跡・7号掘立柱建物跡・11号掘立柱建物跡の柱穴を切っている。

埋土中から大量の土器片が出土しており、廃棄されたものと思われる。埋土下位からは、袋状口縁壺（Fig.36−5）が出土した（Ph.33）。

出土遺物の内、図化したものをFig.36〜39に示す。**1・2**は、手捏ねの盃である。**1**は器壁・口縁部に凹凸が少なく、整った器面に仕上がっている。**2**は、外面に指押さえ痕を明瞭にとどめる。**3〜6**は、壺である。**3**は、直行する口縁を持つもので、体部は算盤玉状に横に張る。口縁は短く直立し、そのまま丸くおさめる。外面は縦方向の刷毛目、内面は工具を用いたなで上げである。**4・5**は、袋状口縁壺である。**4**は、丸味の強い口縁部に長く延びた頸部を持つもので、口縁直下に突帯を巡らせる。頸部は縦方向の刷毛目調整、口縁部は横位のなで調整する。赤色顔料を施した、いわゆる丹塗り土器である。**5**は、埋土下位から出土したもので、口縁部の一部を欠く。**4**に比べると頸部の立ち上がりは短い。**6**は、胴部から頸部にかけての破片である。頸部の付け根に突帯を巡らし、そこから逆「ノ」字形の貼り付け文が垂下する。体部外面と頸部外面は縦方向の刷毛目、体部内面は指頭圧痕の上からなで調整、頸部内面はなで調整する。**7**は、高坏である。内外面とも摩滅している。**8〜12**は、器台である。**8**は、上下端が滑らかに開くもの、**9〜12**は両端が小さく外方向に張り出し「工」字状を呈するものである。いずれも、筒部外面は縦方向に指なでする。**13〜15**は、鉢である。口縁は、短く外反する。外面は刷毛目、内面はなで調整する。**16〜32**は、甕である。**16**は、緩く外反した口縁を持つ。内外面とも摩滅しており、調整痕跡は残っていない。**17〜28**は、大きく「く」字形に折り返した口縁を持つ。**18**は、小型の甕である。底部は径の広い平底で、胴部中程が最も張る。胴部外面は刷毛

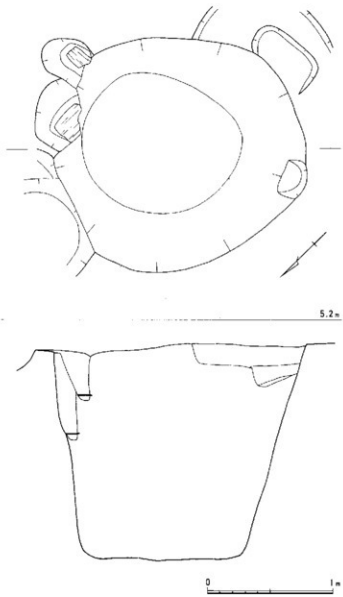
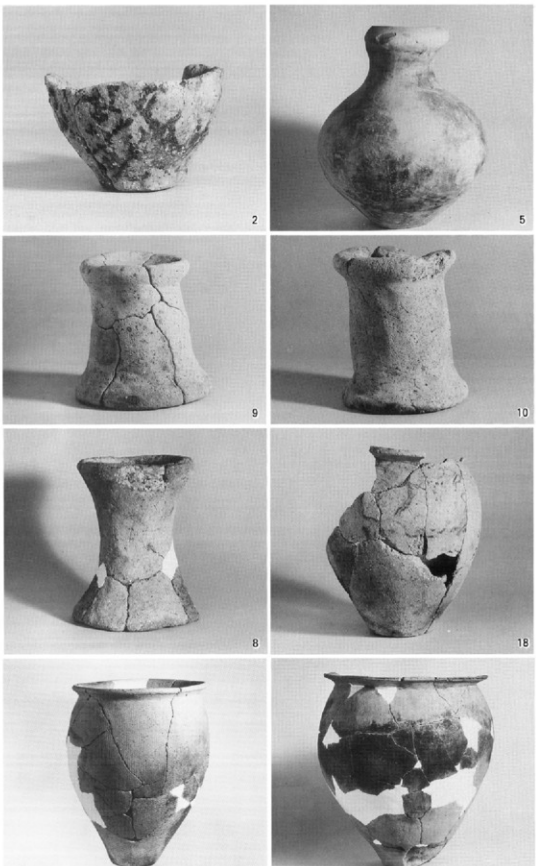


Fig.35　7号井戸実測図（1/30）

Ph.32　7号井戸（東より）

Ph.33　7号井戸遺出土状況（南東より）



Ph.34　7号井戸出土遺物

目調整、内面はなで調整する。22・23の口縁部は、外反気味に折り返す。特に23では丸味が強く、頸部の外面には折り返しの稜は付かない。全形が知れる22で見ると、底部はやや丸味を持った平底で、体部は外反気味に立ち上がり、胴部の上3分の1位で最も張る。内面はなで調整、外面は刷毛目調整する。24の口縁端部は、丸く肥厚している。底部は平底で、体部内面はなで調整、外面は縦刷毛調整する。26～30も「く」字に折り返した口縁部を持つが、口縁部は短く、全体に厚い。30でみると、器高も比較的低いようで、胴部の丸味は強い。内面はなで調整、外面は刷毛目調整する。31・32は、「く」字に折り返した頸部の付け根に、断面三角形の突帯を巡らす。33～36は、底部である。甕であろうか。いずれも平底であるが、36などは底部と体部の境界が丸味を強めている。これらの土器からみて、弥生時代後期前半に位置づけるのが妥当であろう。

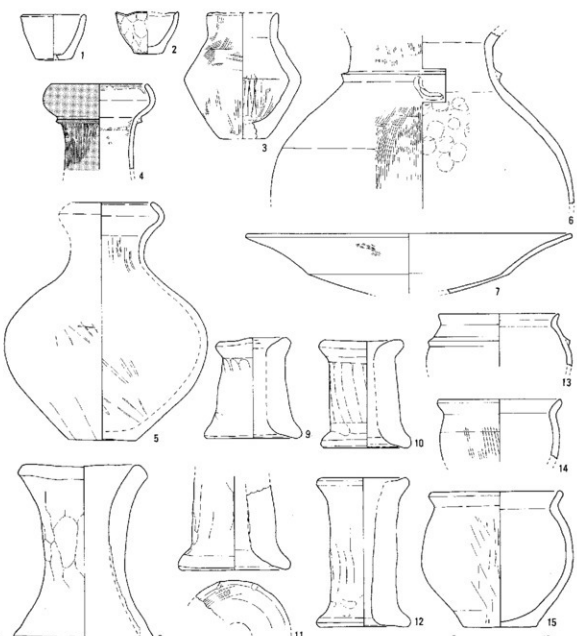


Fig.36　7号井戸出土遺物実測図1（1/4）

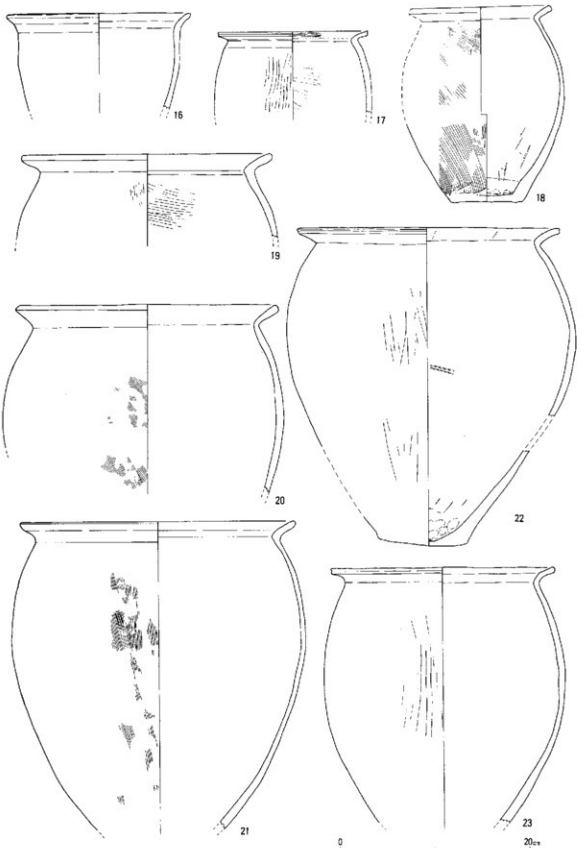


Fig.37　7号井戸出土遺物実測図2（1/4）

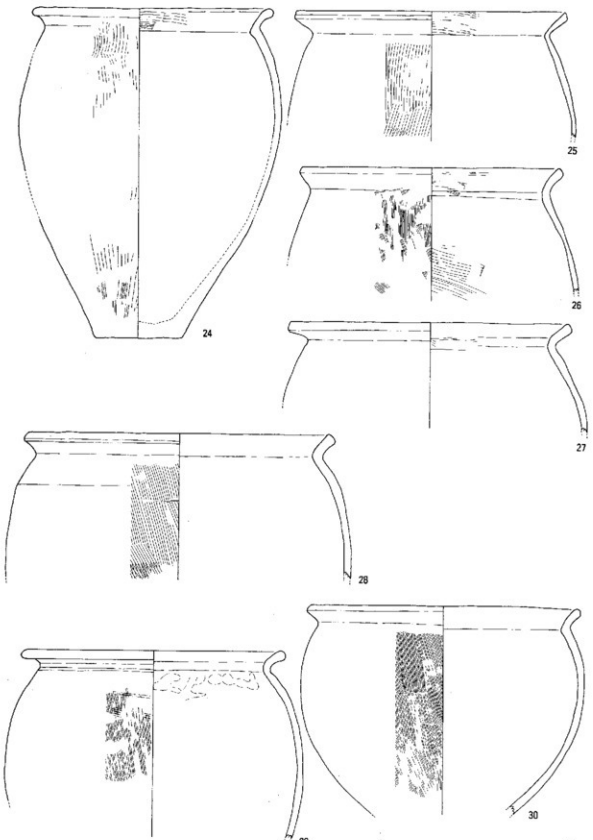


Fig.38　7号井戸出土遺物実測図3（1/4）

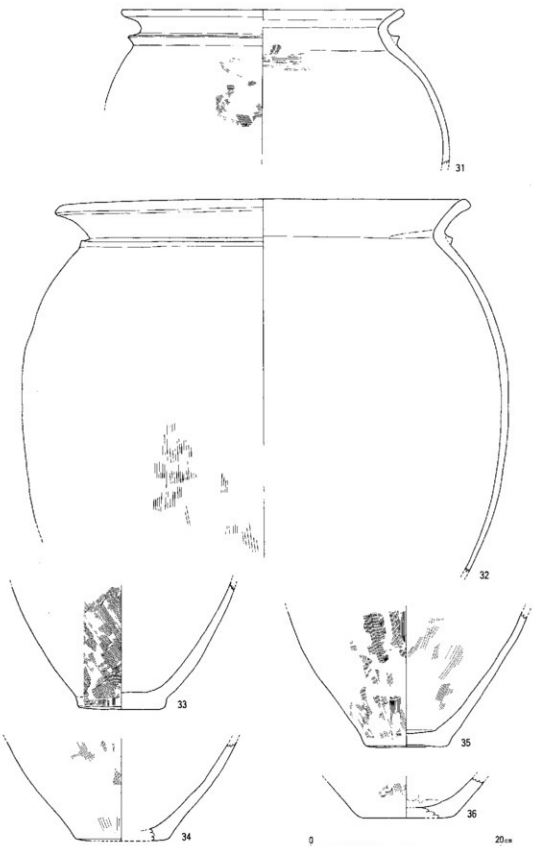


Fig.39　7号井戸出土遺物実測図4（1/4）

8号井戸（SE08＝SP078）

調査区南半の東寄りから検出した。次に述べる9号井戸に切られる。長径1.5メートル、短径1.3メートルの楕円形を呈し、床面の標高は3.3メートルをはかる。壁はほぼ直立する。

出土遺物は小片が多く図示できなかったが、「く」字形を呈して外折する甕の口縁や、中央部が若干下がった平底の底部などが見られた。弥生時代後期前半位を考えれば妥当であろう。

9号井戸（SE09＝SP080）

調査区南半の東寄りから検出した。直径0.95メートルの略円形を呈し、床面の標高は3.3メートルをはかる。北西側の壁は直立するが、南東側では比較的緩い傾斜で立ち上がる。

埋土中より弥生土器の小片が出土しているが、時期を特定するに足るものではない。切り合い関係からみると、弥生時代後期前半の8号井戸を切っており、弥生時代後期前半以後と考えることはできよう。

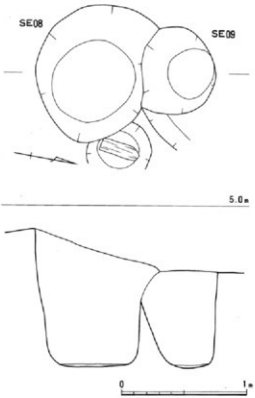
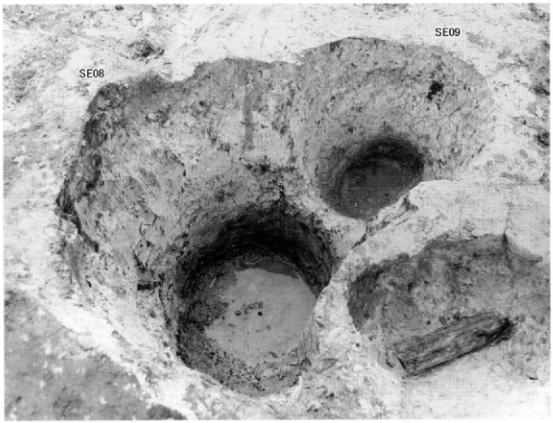


Fig.40　8号・9号井戸実測図（1/30）



Ph.35　8号・9号井戸（SP078・080）（東より）

(4) 溝状遺構

今回の発掘調査では、細長く帯状に掘りくぼめられた遺構を総称して、溝状遺構とした。溝状遺構は、2区から5条検出した。以下、それぞれについて説明する。

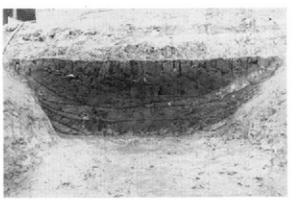
1号溝状遺構（SD01）

調査区の東角を、北東から南に横断する溝である。第35次調査のSD01、第40次調査のSD01と同一の溝と考えられる。検出面上で最大幅4.0メートル（北端付近）、最小幅2.7メートル（中程からやや南寄り）をはかる。溝底の標高は、北端4.66メートル、南端3.96メートルでわずかに傾斜する。溝の断面は、逆台形を呈し、壁の傾斜は強い。

埋土中からは、多量の土器と若干の木製品が出土している。土器は、埋土中にほぼまんべんなく出土しており、層位的な包含状況は認められなかった。また、南端近くから、完形品・大型の破片などが集中して出土している。完形品のひさご形土器なども含まれており、祭祀行為を考えても良いのかも知れない。この土器群の北側には、建築材と思われる板材、最返しが出土した。1号溝の北端近くでは、埋土の中位から、三又鍬・柄などの木製品、銅鏃1点が出土した。

出土遺物の一部をFig.42～52に図示する。これらの内、8・19・22・23・24・35・45・47・49が南端の土器集中部から出土したものである。

1～3は、手捏ねの盃である。いずれも、指押さえによる成形痕跡が並ぶ。4～7は、鉢である。4は、コップ形を呈する。外面は刷毛目調整、内面はなで調整する。5・6は、丸く内湾した体部で、口縁部は直行する。6は、大きく開いた浅鉢形をとる。器壁は摩滅し、調整痕跡は残らない。7は、「く」字形に大きく開いた口縁部を持つ。内外面ともに、刷毛目調整である。これらの鉢は、いずれも若干丸底がかった平底に作られている。8・9は、高杯である。8は、幅の広い鍔状口縁に作る。9の口縁は、大きく開いた体部からほぼ真上に、わずかに外反しつつ立ち上がる。10は、大型特殊器台である。鍔状部分の破片で、鍔部の下に透かしの頭がのぞいている。外面は、剥げ落ちてはいるが、丹塗りである。11～14は、器台である。いずれも成形は丁寧で、歪は少ない。形態的には、両端が大きく開くもの（11・14）と、あまり開かないもの（12・13）とがある。15～18は、袋状口



Ph.36　1号溝状遺構土層（南西より）

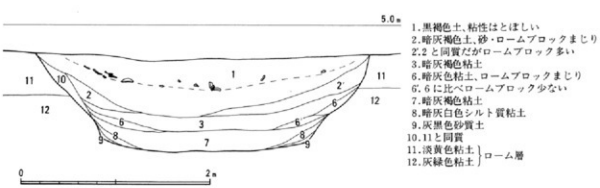


Fig.41　1号溝状遺構土層図（1/40）

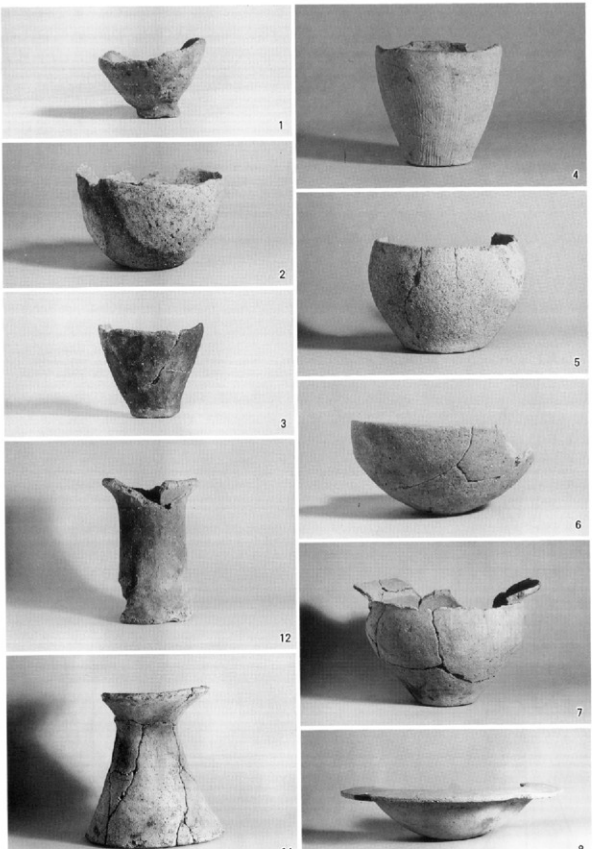
Ph.37　1号溝状遺構（南西より）

Ph.38　1号溝状遺構（北東より）

縁壺である。15・18は、鋭く屈折して逆「く」字形に内折する口縁を持つものである。15は、18に比べると頸部のラッパ状の開きが大きく、内折した口縁部が外反し、その端部が摘み上げたように小さく立ち上がるという特徴を持つ。15の胴部としては、同一個体ではないが、16がこれに当たるだろう。頸部の付け根と胴部中位に突帯を巡らせ、底部はやや丸みを持った平底となる。18では、頸部の立ち

Ph.39　1号溝状遺構遺物出土状況

(1)　南端遺物出土状況（南東より）
(2)　南端土器出土状況（北東より）
(3)　南端土器出土状況（南東より）
(4)　南端ねずみ返し出土状況（南東より）
(5)　三又銛出土状況（南より）
(6)　銛柄出土状況



Ph.40　1号溝状遺構出土遺物1

上がりは低く立ち気味で、全体的に鋭さに欠ける。頸部の付け根に一条の突帯を巡らせる。底部は若干丸味を持った平底で、底部からの立ち上がり部分は外反気味に開いている。17は、丸く内湾した袋状口縁を持つものである。頸部の付け根には突帯が一条めぐり、肩部には2個を1組にした円形浮文が貼り付けられている。19・20は、口縁を小さく水平に折り返した壺である。頸部は、わずかに開きながら直立する。底部は平底である。胴部には、一カ所の穿孔がなされる。21は大型壺の体部である。口縁部を欠失する。口縁部の内面に一条、頸部の付け根に二条、胴部中央に二条の突帯が貼り付けられている。外面は刷毛目調整、内面は底部から胴部下位はなで調整、胴部上半は板状工具によるなで調整、頸部内面は横刷毛調整の上から縦方向になでる。22は、鍔状口縁の壺である。内外面ともに横なで調整で、頸部の付け根に断面「M」字形の突帯が巡る。外面は丹塗りする。23・24は、ひさご形土器である。外面には、赤色顔料を塗布する。23は、完形品であるが、胴部の中央に縦長の穿孔がみられる。25は、大きく弧を描いて外反する口縁を持つ。内外とも刷毛目調整で、胴部中央に穿孔がなされている。26も壺であるが、口縁部を欠くため、全体の形状は知り得ない。外面は刷毛目調整、内面は板状工具でなで調整する。27～34には、口縁を短く外折させた壺を集めた。27は、横に大きく張った胴部を持つ。底部は、丸味を持った平底である。29は、丸く膨らんだ胴部から小さくすぼまっ

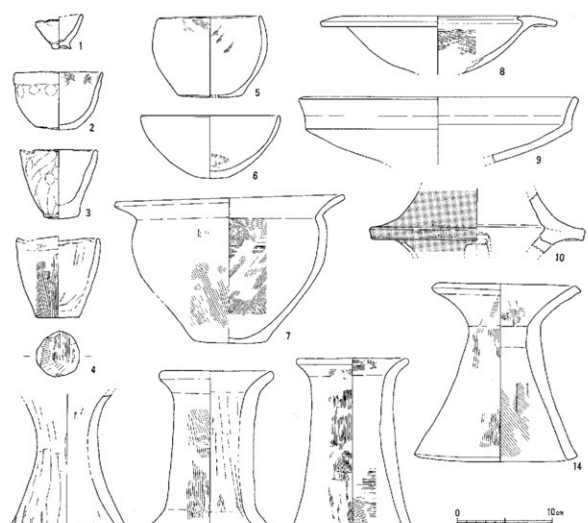


Fig.42　1号溝状遺構出土遺物実測図1（1/4）

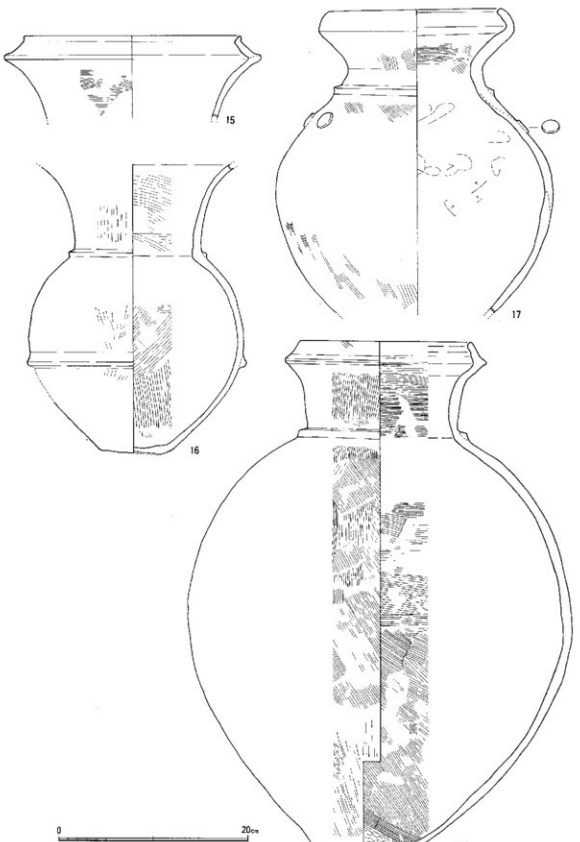


Fig.43　1号溝状遺構出土遺物実測図2（1/4）

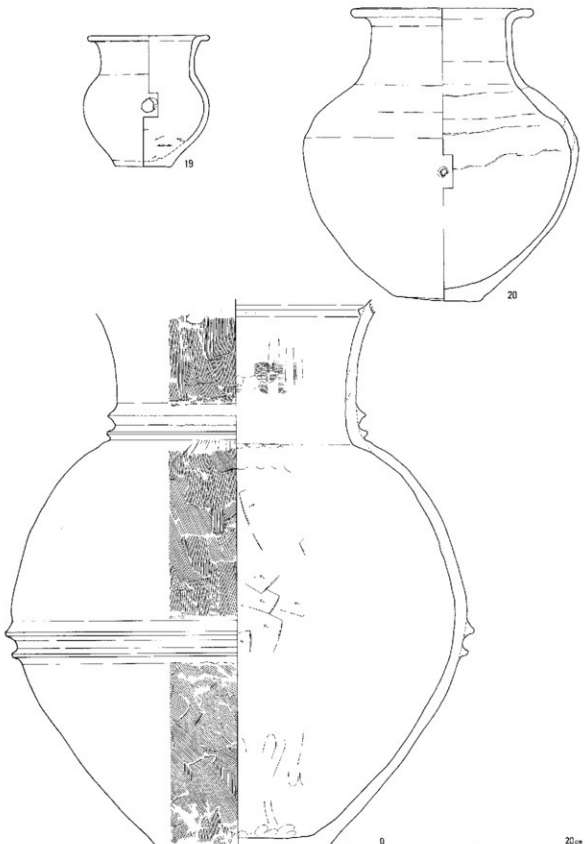
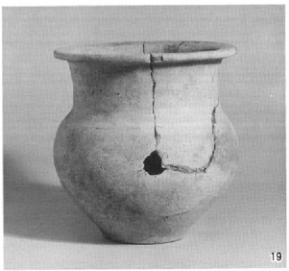
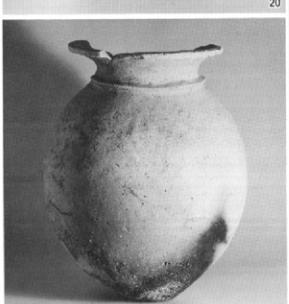
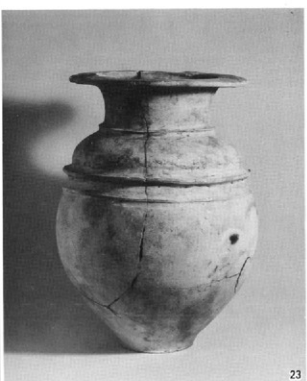


Fig.44　1号溝状遺構出土遺物実測図3（1/4）







Ph.41　1号溝状遺構出土遺物2

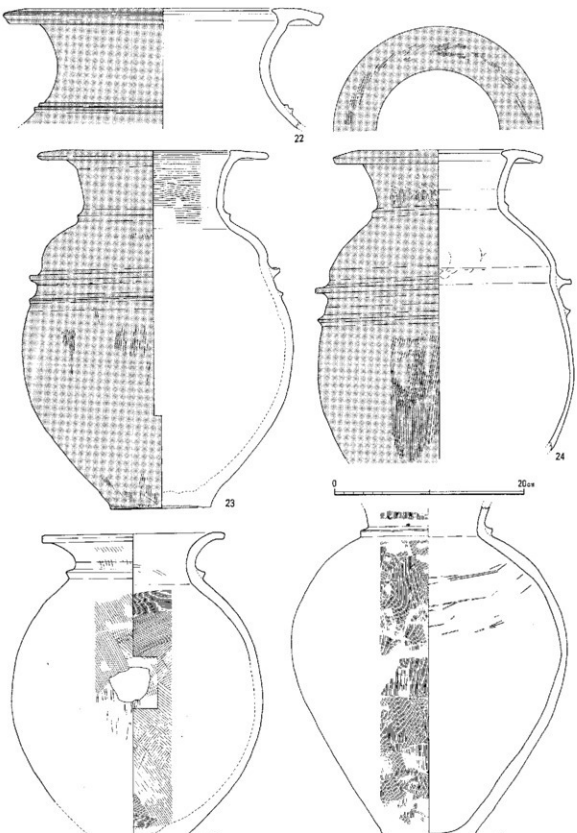


Fig.45　1号溝状遺構出土遺物実測図4（1/4）

て頸部となり、大きく外反して開いた口縁部を持つ。内外面とも刷毛目調整する。34の口縁部は、緩い弧を描いて屈折し、直立気味に外反して、短くおさめる。底部は、丸味の強い平底である。35～51は、甕である。35は、緩く外反気味に開く口縁部を持つ。底部は平底である。外面は刷毛目調整、内面は下半で縦方向、上半で横方向のなで調整を施す。41・42は、台付きの甕である。小さくすぼまった底部に、ラッパ状に大きく開く底部を付ける。外面は縦方向の刷毛目調整、内面はなで調整で平滑に整える。45～47は、水平に近くまで大きく屈折した口縁部を持つ。底部はやや上げ底気味の平底である。胴部外面は縦方向の刷毛目調整、内面の下位は指によるなで上げと指押さえ調整、上半は刷毛目調整の上から工具などを用いたなで調整を加えて平滑に整える。48は、甕棺の口縁である。粘土帯を貼り付け、鍔状の口縁部を作る。50は、日常土器の大型甕である。口縁部の折り返しは小さく、頸部の直下に断面三角の低い突帯一条を巡らせる。外面は縦方向の刷毛目、内面はなで調整で平滑に仕上げている。51は、甕棺の口縁端部である。口縁端部は平らに面取りし、板状工具の小口による刺突文が並ぶ。

52～59は、木製品である。52・59は、鼠返しである。かなり朽ちており、表面の削り痕跡などはほとんど認められない。縦方向に木取りしており、断面図に示すように年輪に沿った下向きの湾曲が生じている。53は、竪杵の半切したものである。細かい削りを重ねて、成形している。54は、鍬などの

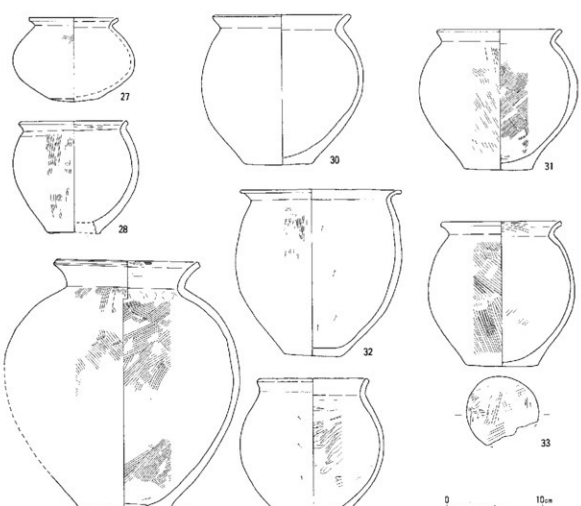
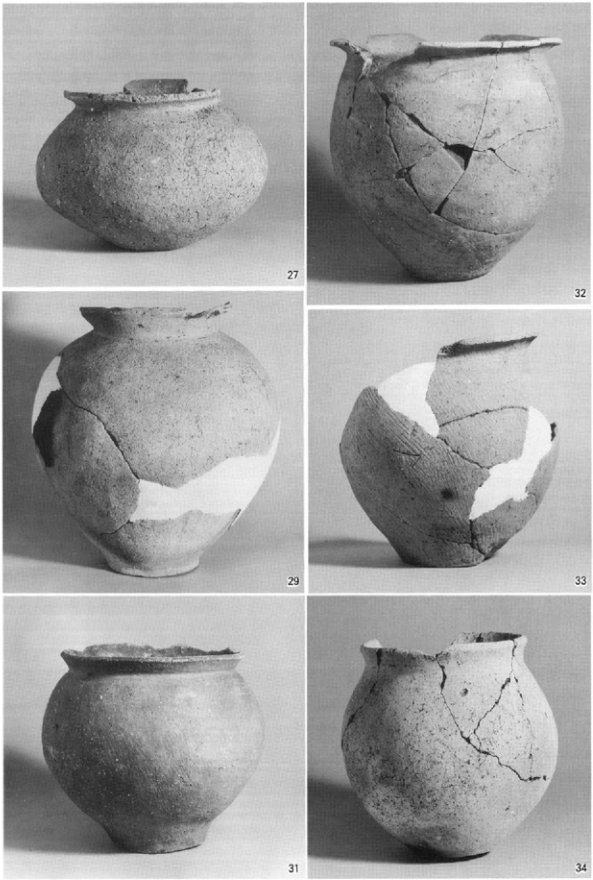


Fig.46　1号溝状遺構出土遺物実測図5（1/4）



Ph.42　1号溝状遺構出土遺物 3

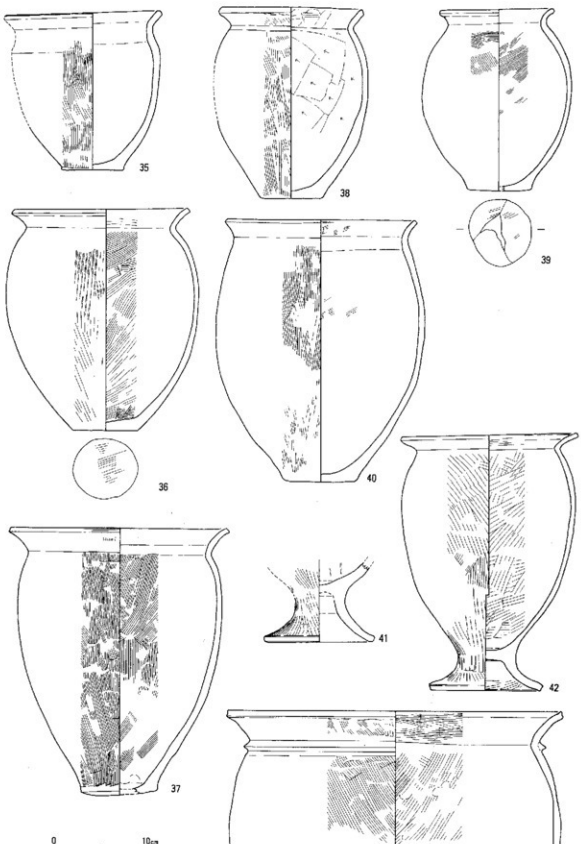
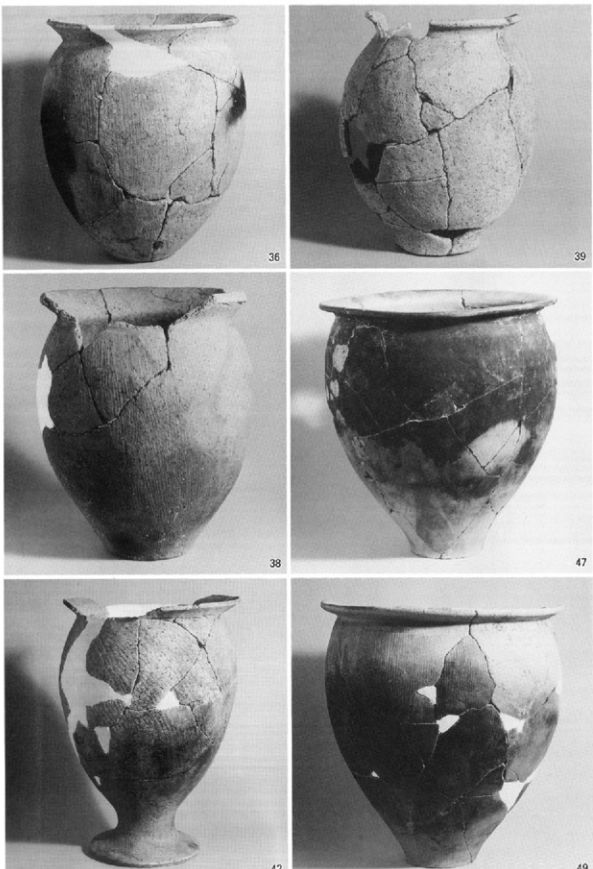


Fig.47　1号溝状遺構出土遺物実測図6（1/4）



Ph.43　1号溝状遺構出土遺物 4

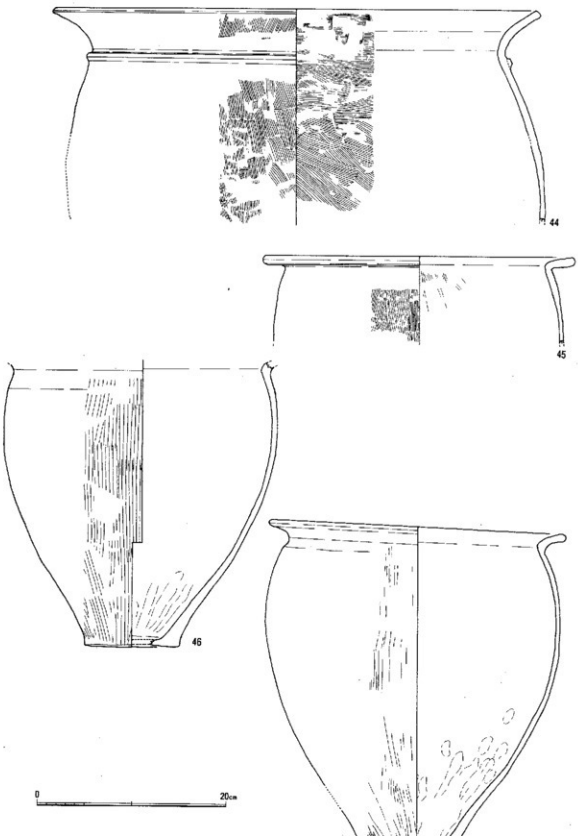


Fig.48　1号溝状遺構出土遺物実測図7（1/4）

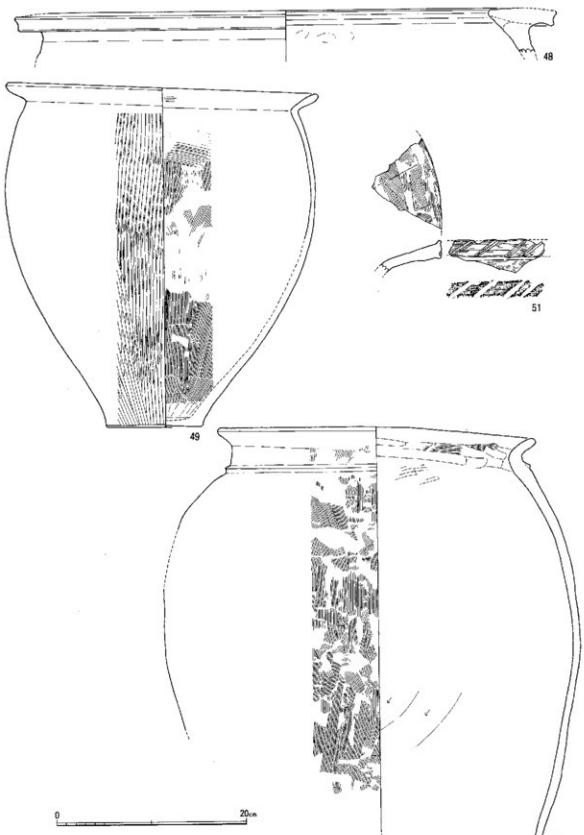
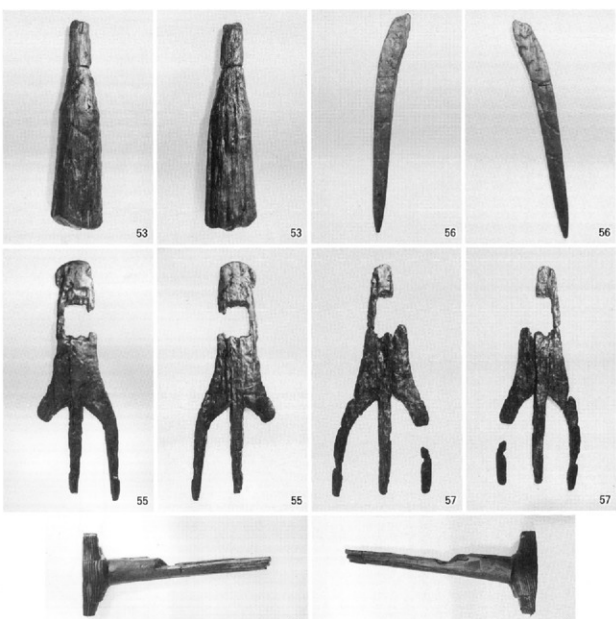


Fig.49　1号溝状遺構出土遺物実測図８（1/4）

柄である。全体に朽ち気味である。断面は菱形に近い楕円形で、朽ちて変形したものとも思われるが、厚さ的に農具としての実用に耐えたのか、疑問も残る。55～57は、三又鍬である。遺存状態は良くない。55と57は、重なって出土した（Ph.39-(5)）。56の歯が最も遺存状態がよい。それをみると、全面削りによる成形で、歯部の両面と側面は平らに面取りされている。歯部の内側は、山形に尖らせる。歯先は、細かい削りで丸味を持たせ、内側がやや尖った楕円形に作る。55・57でも、同様の加工がなされていたものと推測される。58は、「T」字形の木製品である。一木からの削り出しであるが、断面楕円形の竿部とこれに斜めに取り付く柄状部分からなる。竿部の一側面には、平行した二本の樋が刻まれ、これを繋いで小孔が穿たれている。柄状部分は、一端を欠く。遺存している方でみると、軸の分岐部分と端部の間は帯状に削りくぼめ、端部の小口面には軸と平行して細い溝を切っている。基部は、平坦に削る。この形状を見る限りでは、柄状部分の基部を別材に当てて、帯状に削りくぼめた部分に紐をかけて緊縛したことが推測される。用途・機能は不明である。



Ph.44　1号溝状遺構出土木器

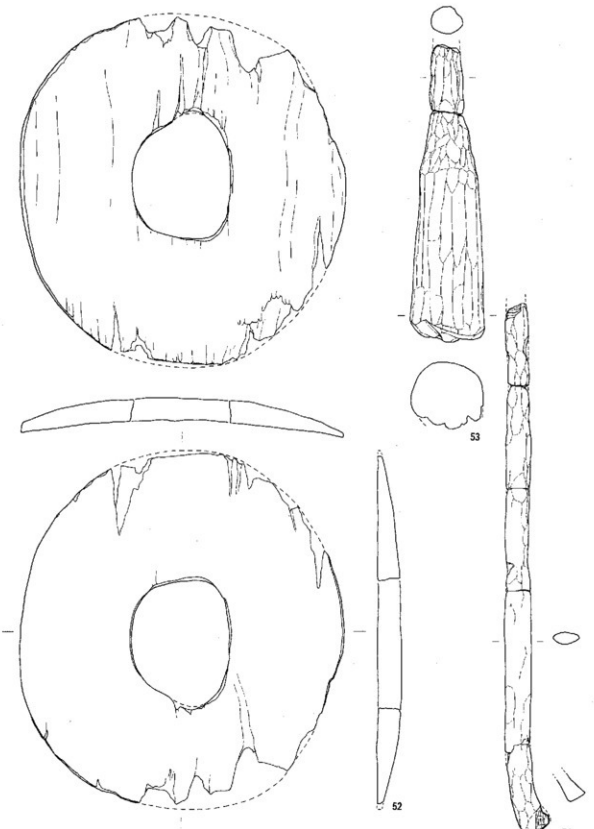


Fig.50　1号溝状遺構出土遺物実測図9（1/4）

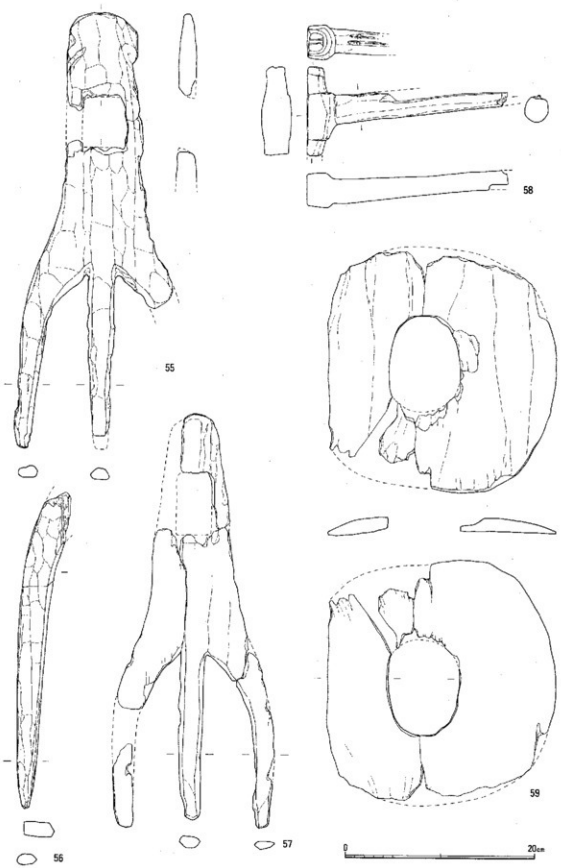


Fig.51　1号溝状遺構出土遺物実測図10（1/4）

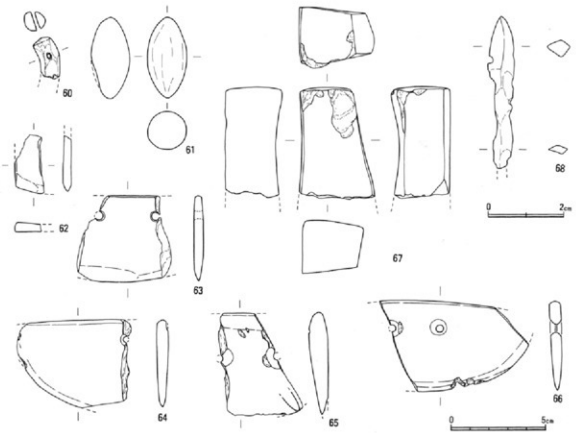
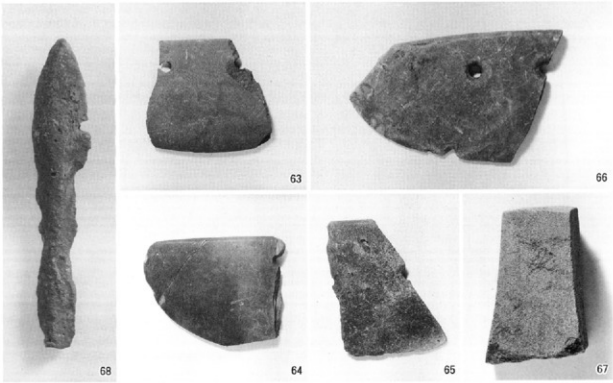


Fig.52　1号溝状遺構出土遺物実測図11（68-1/1、他は1/2）



Ph.45　1号溝状遺構出土銅鏃・石器

60・61は、**土製品**である。60は、土錘の頭部である。指押さえで成形した後、細い孔を突き通している。61は、投弾である。

62～67は、**石製品**である。62は、扁平片刃石斧の小片であろう。黒色の堆積岩を用いる。63～66は、石包丁である。いずれも、小豆色の輝緑凝灰岩を用いている。67は、砂岩製の砥石である。各側面はそれぞれ砥石として用いられている。

68は、**銅鏃**である。刃部には鏑が立ち、断面は菱形を呈する。刃部のみ一応研磨されているが、鋳造時の凹部をとどめており、茎部は鋳放しのままである。茎部の先端を若干欠く。

南端土器集中部の遺物からみて、この祭祀が行われたのは弥生時代中期後半、埋土中の土器全体を見て1号溝が埋没したのは、弥生時代後期中頃から後半にかかる時期と考えられる。

2号溝（SD02）

2区の中ほどで検出した、南東から北西に掘られた小溝である。区画溝であろうか。時期不明。

3号溝・4号溝（SD03・SD04）

2区の中ほどで検出した、南北方向の小溝である。検出段階で別の遺構番号を付けたが、調査過程で一連の溝であることを確認した。区画溝であろうか。時期不明。

5号溝（SD05）

2区の北東角で検出した、南南東から北北西を指す小溝である。区画溝であろうか。時期不明。

6号溝（SD06）

1号溝から分岐して掘られている。埋土の上層では1号溝に切られていたが、中位以下では切り合いは確認できなかった。弥生時代後期中頃の土器片が出土している。

Ph.46　6号溝状遺構（東より）

(5) その他の出土遺物

ここでは、これまでの記述から漏れた遺物を、包含層の遺物を中心に略述する。なお、以下の記述では特に注しない限り、包含層からの出土遺物である。

1～18は、**弥生土器**である。**1・2**は、手捏ねの盃である。内外面には、指頭圧痕が並ぶ。**3～6**は、鉢である。**3・4**は直行する口縁を持つもので、内面はなで調整、外面は刷毛目調整する。**5・**

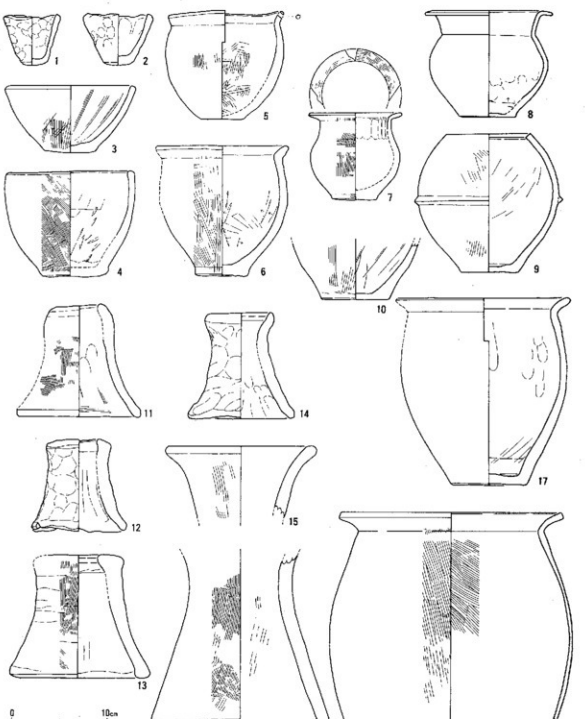


Fig.53 その他の出土遺物実測図1 (1/4)

Ph.47　その他の出土遺物1

6の口縁は、小さく外折する。5の口縁部には穿孔がみられるが、相対する位置にもう一孔あるかどうかは、ちょうど破損しており不明である。内外面ともに刷毛目調整する。6は、内面はなで調整、外面は刷毛目調整である。7～9は、壺である。7・8は径の大きな頸部を持ち、ほぼ水平に短く折り返して口縁となる。7の内面はなで調整、外面は刷毛目調整する。8の器壁は摩滅しており、調整痕が残らない。内面には、かすかに指押さえの凹凸が認められる。9は、無頸壺である。一見頸部が剥離した擬口縁に見えるが、端部はなで調整で面取りしてあり、これが口縁部であることが知れる(Ph.47-9)。内面は工具を用いたなで調整、外面は刷毛目調整で、胴部中位に突帯が巡る。10は、底部である。内面は板状工具によるなで調整で、なで上げた痕跡が明瞭に残る。外面は、縦方向の刷毛目調整である。11～16は、器台である。11の上端部は内湾して、すぼまる。外面は刷毛目調整、内面は指押さえ、裾近くでは横刷毛目調整する。12の上端は、やや内側に張り気味になるが、これは上端直下内面を横方向に強くなでることによるものである。上端部は外傾して面取りされる。外面は指押さえ調整で、内面には絞り痕跡がみられる。13は、上下両端を肥厚させる。外面は刷毛目調整、内面はなで調整する。14の上端部は、内湾気味に外反し、受け口状に見える。内外面ともに指押さえ調整する。15・16は、両端が外反して開くタイプである。内面は工具を使ったなで調整、外面は縦方向の刷毛目調整である。17・18は、甕である。口縁は、「く」字状に外折する。17の器面は極めて平滑で、工具によるなで調整を考えたい。内面は下部付近は工具を横に当てたなで調整、中位から上は指

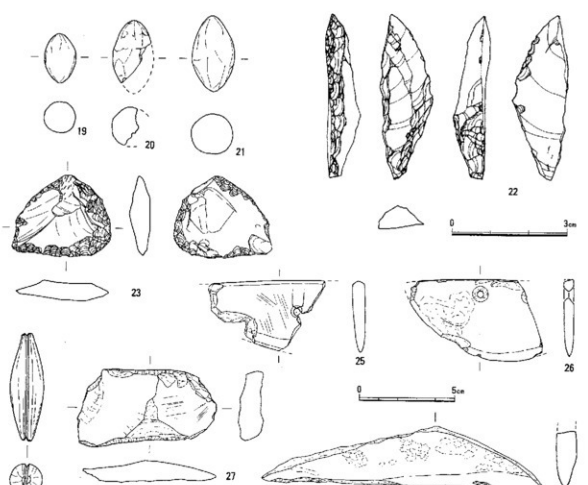
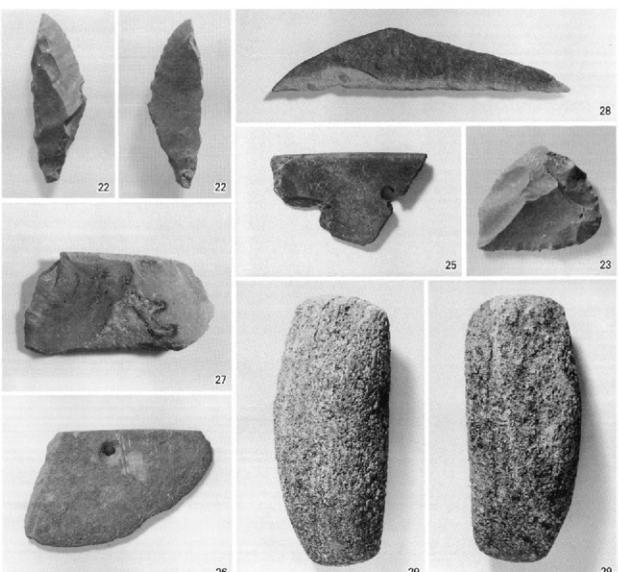


Fig.54　その他の出土遺物実測図2（22-1/1、他は1/2）

なで調整する。2区SP220出土。**18**は、内外面とも刷毛目調整で、内面にはさらになで調整を加え、特に下半部は刷毛目をなで消している。前述した3区SP315出土（p.23）。

19～21は、**土製**の投弾である。指なでで成形している。

22～29は、**石製品**である。**22**は、ナイフ形石器である。黒曜石製。これについては、福岡市教育委員会の吉留秀敏氏から報告をいただいたので、第三章に掲載する（p.75）。**23**は、スクレイパーであろう。側縁には、押圧剥離が並ぶ。硬質頁岩を用いている。表面は風化しておらず、遺存状態は良好である。**24**は、滑石製の石錘である。細かい削りで、整った円形に作る。**25・26**は、石包丁である。小豆色の凝灰岩を用いる。**27**は、不明石製品である。中央に穀を持って左右両面が傾斜し、細かい擦痕がついた平滑な面をなす。長側面は、削り面である。裏面は荒割りのままで、特に調整されていない。擦痕をとどめた面を砥面とすれば、砥石と考えることもできよう。濃灰色の堆積岩を用いる。**28**は、石鎌である。灰緑色の砂岩を用いる。全体に表面が荒れており、本来の器面は刃部近くにしか残っていない。3区SP329出土。**29**（Ph.48）は、磨製石斧である。断面が楕円形を呈する円柱状の花崗岩を用い、一端を両側から研磨して、刃をつける。刃先は使用により、鈍く潰れている。



Ph.48　その他の出土遺物2

第三章　まとめ

本調査地点をめぐる弥生時代集落の状況については、すでに『比恵遺跡13』の中で、整理が試みられている（福岡市埋蔵文化財調査報告書第368集　福岡市教育委員会1994年、135ページ）。詳細はそれに譲り、ここでは第58次調査で検出した各遺構について、時期的・分布的な整理を行う。

1．掘立柱建物跡（以下SBの略号を用いる）

1間×2間の東西棟がほとんどであった。南北棟は復元した17棟の内、SB04・SB05・SB10・SB14の4棟である。次に、時期別に見ると、弥生時代中期末から後期初頭にかかる建物SB07・SB08・SB10・SB11・SB16、後期初頭と思われる建物SB01・SB15、後期前半の建物SB02・SB05・SB06・SB14・SB17、後期中頃の建物SB03・SB09・SB12・SB13、後期後半の建物SB04となる。ただし、重複関係からみて、SB07・SB08・SB10・SB11およびSB05・SB06は、同時には存在し得ない。また、軒の葺きおろしを想定すると、SB12とSB13も並立しない。

礎板の構造からみると、厚い板材を敷くものと、薄い板材を用いるものとがあり、両者が混用されることはない。礎板を置く方向も、建物の桁もしくは梁方向に合わせている。薄い板材を用いたものは、SB04・SB05・SB09・SB17があり、厚い板材を用いるものに比べると時期的に下る傾向があるようである。

なお、この他にも建物としてまとめきれなかった、多くの柱穴がある。それを考え合わせれば、建物の密度、建て替えの頻度はさらに激しかったものと推測される。

2．井戸（以下、SEの略号を用いる）

分布的には、調査区南半の東側に集中する群（A群）と南西辺の中ほど付近に集中する群（B群）と調査区中ほど西寄りに分布するもの（C群）がある。これを時期別に整理すると次のようになる。弥生時代中期中頃SE03（A）、中期末頃SE04（A）、後期前半頃SE01（A）・SE07（C）・SE08（A）、後期中頃SE05（B）、後期後半SE06（B）、終末期頃SE02（B）、後期前半以後SE09（A）となる。すなわち、後期前半以前はA群、後期中頃以後はB群と分布が分かれていることが知れる。

3．溝状遺構（以下、SDの略号を用いる）

第58次調査で検出したSD01は、第35次調査のSD01、第40次調査のSD01と一連の溝と考えられる。掘削されたのは弥生時代中期後半頃で、埋没したのは後期後半と考えられる。開題はこの溝の性格であるが、第40次調査の報告では、丘陵縁辺部に設けられた溝としている。そして、これまでの調査成果を総合して、集落の中心部分を台地尾根周辺の西側におきながら、SD01埋没後に集落の範囲が東側台地縁辺部に拡大したとする。これは、地形が東側に傾斜していたことによるが、今回の調査と昭和10年代の地図の検討からは、第58次調査地点の北側に、東から西に入り込む谷部があったことが想定された。するとSD01は、地形の傾斜に応じたものではないことになる。第40次調査の所見を容れれば、当初SD01に囲い込まれた集落の範囲には、谷部も含まれていたことになる。この溝が、環濠の一部とみなし得るのかどうか、さらなる検討が必要である。また、もし環濠とすると、その内部に谷部－耕作地を含んでいたことになる。今後、さらにSD01の延長を検出し、旧地形に関するデータを蓄積することに期待したい。

4．比恵58次調査出土の旧石器時代資料

Fig.55－1は3区包含層より出土したナイフ形石器である。包含層はAso－4起源の八女粘土層を不整合に覆う弥生時代以降の堆積であり、石器本来の埋没位置を遊離したものと考えられる。

ナイフ形石器は完形品であり、右側辺に新しい小剥離がある。漆黒色不透明の黒曜石を素材としている。表面のパティナは著しいが、二次的な磨滅は認められない。縦長剥片の打点部を先端とし、二側辺にブランティングを施している。ブランティングは両側共に急角である。左側辺は腹面の打撃部に潰れがみられ、右側辺は腹面と背面から調整を施している。また、基部の背面に右側辺側からの平坦剥離が行われている。本石器の大きさは、長さ4.3cm、幅0.9cm、厚さ0.9cm、重量3.79ｇを測る。

Fig.55　出土石器（1/1）

さて、本調査地点は那珂川と御笠川に挟まれた比恵、那珂丘陵上に位置している。この丘陵は段丘礫層上に堆積したAso－4火砕流を基盤としており、上面が平坦で現在の標高は5～10mほどを測る。またこの丘陵は河川の浸食や雨水、湧水等の浸食で開析され、八つ手状の平面観を呈する。

本地点周辺の旧石器時代遺跡は、比恵遺跡群で6地点、那珂遺跡群で9地点、さらに那珂遺跡の東側低位段丘上に立地する那珂君休遺跡で2地点と、現在合計17地点で確認されている（表1）。なお、ほとんどの遺跡は本地点と同様に弥生時代以降の開発により、本来の包含位置を離れて発見されている。ただし、出土位置は浅い谷部や丘陵縁辺での出土が多い。これは旧石器時代遺跡の分布に共通する要素である。また、細石器段階の石器は少なく、前段階のナイフ形石器段階後半の時期が多い。

本調査で出土した旧石器は僅か1点の資料ではあるが、本丘陵においてナイフ形石器段階の確実な資料として最も北端に出土した例である。厳密な時期を知るには実に不十分であるが、厚みのある縦長剥片を素材とし、二側辺調整が見られることから、後期旧石器段階中頃の所産と考えたい。遺跡の性格や所属する石器群の詳細については、今後の本遺跡群における当該期資料の集積に期待したい。

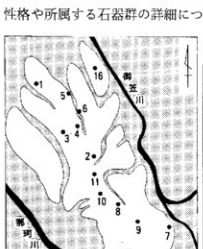


Fig.56
比恵・那珂台地の旧石器時代遺跡

表1　比恵・那珂遺跡群における旧石器時代資料出土地点（1997年現在）

地	遺 跡	次数	出 土 石 器	石 材	報告書(市)集	備 考
1	比恵	4	削器、剥片	黒曜石、安山岩	市岡文献1980	"1"は「福神遺跡」
2	比恵	18	剥片	黒曜石	237集	
3	比恵	19	ナイフ形石器	黒曜石	292集	
4	比恵	42	ナイフ形石器	黒曜石	「年報7」368集	年報記載、報告書中第
5	比恵	43	削器	黒曜石	453集	弥生時代に二次利用
6	比恵		ナイフ形石器	黒曜石	本報告	
7	那珂	7	台形石器、剥片	黒曜石、碧玉質岩	152集	
8	那珂	8	ナイフ形石器、剥片、石核	黒曜石、安山岩	153集	
9	那珂	13	ナイフ形石器、剥片	黒曜石	232集	
10	那珂	15	台形様石器	黒曜石	287集	
11	那珂	18	ナイフ形石器	黒曜石	292集	
12	那珂	23	槍先形石器、剥片	黒曜石	254・290・309集	形態1997にて再検討
13	那珂	33	削器	安山岩	384集	
14	那珂	37	剥片	黒曜石	366集	
15	那珂	41	ナイフ形石器、削器、剥器剥片、石核、砕片	黒曜石、珪質頁岩ガラス質安山岩	398集	
16	山王神社	表採	三稜尖頭器	黒曜石		

市岡文献1980『福岡市比恵遺跡』福岡市比恵遺跡調査会

杉原敏之1997「九州の先刃器石器群　筑紫平野の「槍先形石器」」『九州歴史資料館研究論集』23、九州歴史資料館

比恵遺跡群25
福岡市埋蔵文化財調査報告書
第561集

平成 10 年 3 月 31 日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8－1
印刷　株式会社　川島弘文社
福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6番41号